

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

# 觀音林遺跡

(第三次発掘調査報告書)



【観音林遺跡（第三次発掘）出土、大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式土偶】

1985. 3. 20

青森県五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書

- |       |      |           |
|-------|------|-----------|
| 第 1 集 | 1968 | 津軽・前田野目窯跡 |
| 第 2 集 | 1974 | 原子遺跡      |
| 第 3 集 | 1975 | 観音林遺跡①    |
| 第 4 集 | 1979 | 孤野遺跡①     |
| 第 5 集 | 1980 | 孤野製鉄遺跡①   |
| 第 6 集 | 1983 | 福泉遺跡      |
| 第 7 集 | 1984 | 観音林遺跡②    |
| 第 8 集 | 1985 | 観音林遺跡③    |

## 序 文

五所川原市教育委員会 教育長 鈴木太左衛門

昭和48年(1973)に発見された五所川原市大字松野木字花笠81番地にある觀音林遺跡の調査は次の通り行われた。

### 第1回発掘調査

昭和49年(1974)に実施。翌50年(1975)に五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集として報告。

### 第2回発掘調査

昭和58年(1983)に実施。翌59年(1984)に第7集として報告。

### 第3回発掘調査

昭和59年(1984)に実施。

今回の第3回目の調査は、昭和59年7月30日より8月11日まで12日間にわたって発掘が行われ、いよいよ觀音林遺跡の実態がわかつってきた。

本冊子がその調査の結果であるが、当方の古い時代を知る記録としてお役にたてばまことに幸いである。

本調査にあたって、汗まみれ泥まみれになってご協力下さった諸先生方はじめ生徒の皆様方のご労苦、並びに地主の長尾良治氏のご好意に対して深甚なる謝意を表します。

## 例　　言

1. この報告書は、五所川原市教育委員会が実施した「観音林遺跡」の第三次発掘調査の記録である。本遺跡は青森県五所川原市大字松野木字花笠81番地に所在する。
2. 発掘調査は、昭和59年7月30日より8月11日の期間で実施した。
3. 本報告のうち、出土した「骨類」の鑑定は日本大学金子浩昌氏に依頼し、その結果については「表Ⅱ」に示したとおりである。
4. また、本報告書の中の地学に関する事項は、日本地学教育学会々昌川村真一が担当執筆した。
5. その他の記述は、新谷雄蔵が担当執筆した。
6. 本遺跡に関する測量、遺構の実測は五所川原市建設課員が担当し原図の作成にあたった。
7. 発掘に必要な資材・人員の輸送、その他は五所川原市教育委員会職員が担当し発掘を援助した。
8. 青森県教育庁文化課員天馬勝也氏、一町田工氏より発掘に関する指導助言をいただいた。ここに記して謝意を表する次第である。
9. 出土遺物は、すべて五所川原市立歴史民俗資料館に保管し、研究資料にする。
10. おわりになりましたが、地主である長尾良治氏の御理解ある御協力に感謝申し上げる次第である。

# 目 次

## 序 文

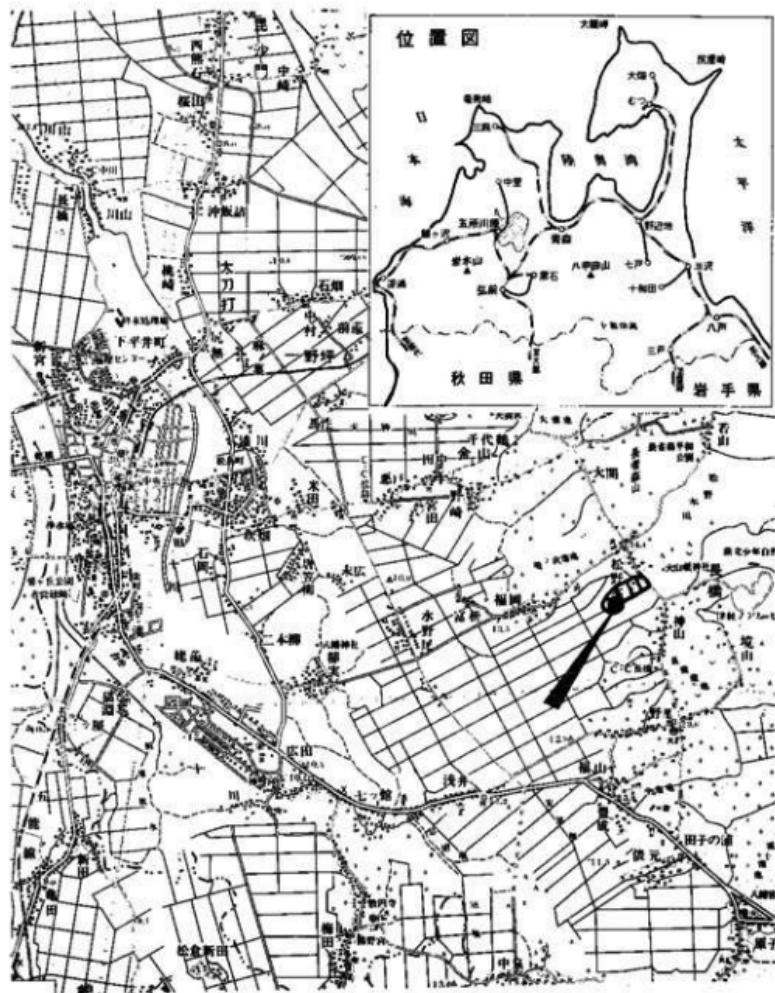
## 例 言

第 1 図 遺跡付近地形図	1
写 真 写 1~19 (発掘スナップ、発掘区、出土状況)	2~31
(1) 調査に至る経過と調査要項	32
a 調査に至る経過	32
b 調査要項	32
(2) 発掘日誌抄	36~39
第 2 図 - 1 鏡音林遺跡発掘区配置図	40
第 2 図 - 2 鏡音林遺跡位置図 (付近遺跡)	41
第 3 図 - 1 A 地区 グリット配置図	42
第 3 図 - 2 B 地区 グリット配置図	42
第 3 図 - 3 C 地区・D 地区 グリット配置図	43
(3) 地形・層序	44~45
第 4 図 - 6 鏡音林遺跡基本層序図	46
第 4 図 - 5 D 地区 堀状造構基本層序図	47
参考図 D 地区 D <sub>1</sub> トレンチセクション図 (第二次)	48
第 4 図 - 1 D 地区 D <sub>2</sub> トレンチセクション図	49
第 4 図 - 2 D 地区 D <sub>3</sub> トレンチセクション図	49
第 4 図 - 3 D 地区 D <sub>4</sub> トレンチセクション図	50
第 4 図 - 4 D 地区 D <sub>5</sub> トレンチセクション図	50
第 4 図 - 7 A 地区 G <sub>1</sub> ・G <sub>2</sub> グリット北壁セクション図	51
第 4 図 - 8 A 地区 H <sub>2</sub> グリット北壁ヒクション図	52
第 4 図 - 9 B 地区 G <sub>1</sub> ・G <sub>2</sub> グリット北壁セクション図	53
第 4 図 - 10 C 地区 H <sub>3</sub> ・13・14 トレンチ南壁セクション図	53
(4) 堀状造構	54~55
第 5 図 B 地区 造構実測図	56
第 6 図 C 地区 壁穴式住居址実測図	57
第 7 図 D 地区 D <sub>1</sub> ~D <sub>5</sub> 堀状造構断面図	58
〔表 4〕 各堀状造構の構成図	59
(5) 出土造構	60
(1) B 地区 土壙群・土器	60

(2) C地区	堅穴式住居址	61
(3) D地区	烟状遺構	61
(4) A地区	土壙・焼土堆積遺構	62
〔表I〕	縄文時代編年表(含・觀音林遺跡第一・二・三次)	63
〔表II〕	觀音林遺跡出土骨類鑑定表	64
〔表III〕	觀音林遺跡出土石器・石製品一覽表	65
〔6〕	出土遺物	73
(1)	土器・土製品	73
(2)	骨類	76
(3)	石器・石製品	77
〔7〕	考 察	79~83
◎	出土資料	84
・	土器・土製品	84
・	骨類	139
・	石器・石製品	141
章	あとがき	159
章	参考文献	159

(遺跡付近地形図) 第1図

S =  $\frac{1}{50,000}$



〔発掘スナップ〕 その1

S写 1

①発掘隊の皆さん（一日おわってにっこり）



②健斗した  
青森山田高校の  
皆さん



〔発掘スナップ〕 その 2

S写 2

③おばさん方のガンバリ



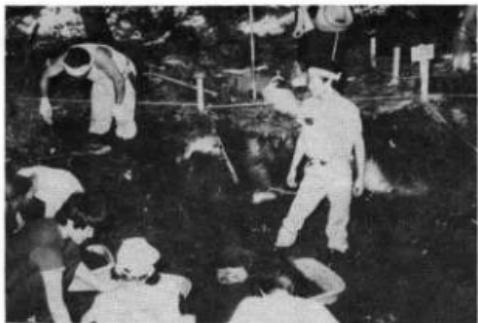
④少年考古学者 2人  
(飯詰小の諸君)



⑤やがて大きくなったら!!  
(飯詰小の諸君)



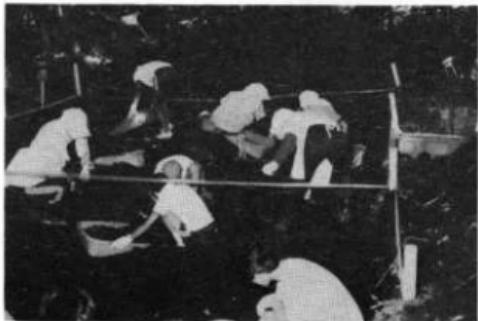
⑥C地区堅穴住居址にいどむ  
山田高校生



⑦住居址のカマドの検出に慎重な  
山田高校生



⑧住居址の床面が出た//



⑨ A 地区 G<sub>1</sub>・G<sub>2</sub> グリッド  
のセクション図を  
とる。 →

⑩ A 地区 H<sub>2</sub> グリッド  
おや？ 出たぞ。



⑪

A 地区 I グリッド 2 人 →  
でひっそり頑張る。





①

- ・A地区G<sub>1</sub>グリットの  
西壁セクションの状況



②

- ・A地区G<sub>1</sub>-G<sub>2</sub>グリットの  
北壁セクションの状況



③

- ・A地区H<sub>2</sub>グリットの  
北壁セクションの状況

火山灰層



④

・昭和58年の発掘区の掘り返えし



⑤

・昭和59年の拡張区

↗ N層上面

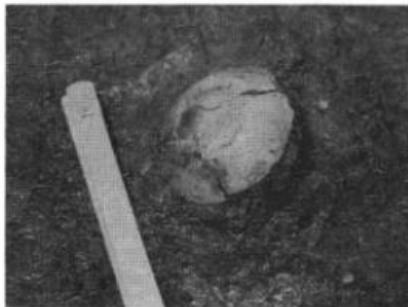


⑥同上アップ



①石皿、土器の出土状況（N層）

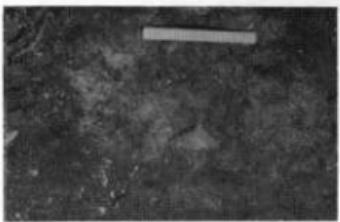
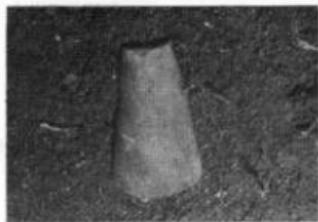
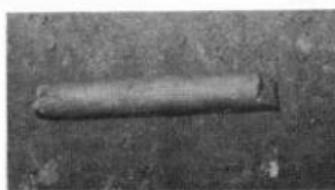
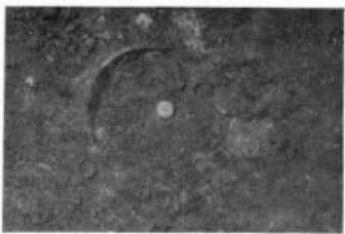
・包含層の状況（A地区Gグリット  
北壁）



②土器底部の出土状況（A地区 i グ  
リット N層）



③土器の出土状況（A地区G<sub>2</sub>グリッ  
ト N層）



①・③=石棒、②=小玉、④・⑧=石器、⑤=石斧、⑥=削器、⑦=クボミ石

〔遺物の出土状況〕

S写 9

①土偶 (H<sub>2</sub>)



②壺形土器 (H<sub>2</sub>)



③鉢形土器 (G<sub>2</sub>-N)



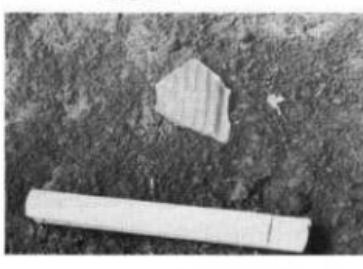
④鉢形土器 (袖珍土器)



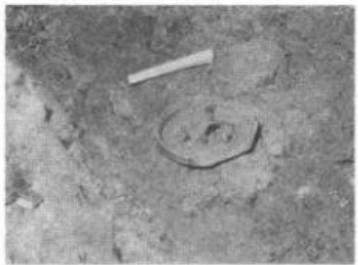
⑤土偶破片



⑥土器片



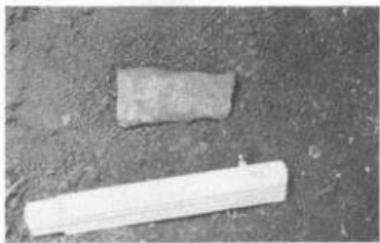
①皿形土器（炭火物入り）



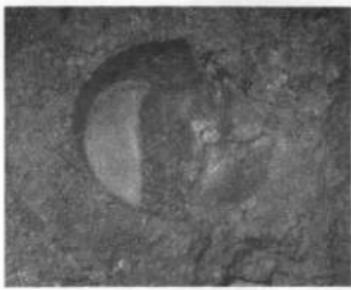
②壺形土器（下半）



③土偶破片



④土器底部（G<sub>2</sub>-N）



⑤骨片（H<sub>2</sub>-II）



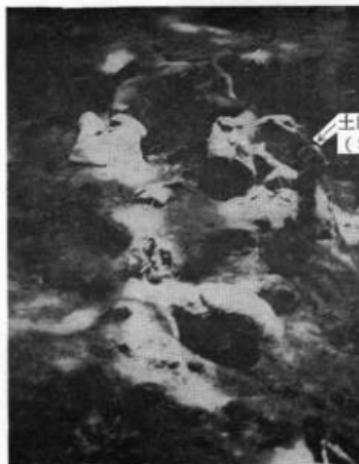
⑥骨片（H<sub>2</sub>-II）



[ C 地区、堅穴住居址カマド付近の状況 ] その 1  
( いずれも南方より )

S 写 11

②



土師器窯  
(写 19)

①



③



④



①→煙出し部の調査



②→カマドの調査



③→カマドの精査



④カマドと壁面の精査



(いずれも南方より)

[ D 地区トレンチの状況 ] その 1

S 写 13

( いずれも南方より )

①D<sub>3</sub> トレンチ



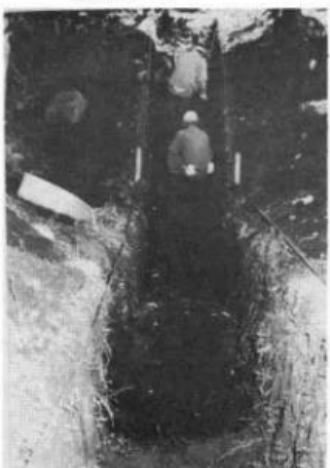
②D<sub>2</sub> トレンチ



③D<sub>4</sub> トレンチ



④D<sub>3</sub> トレンチ



⑤D<sub>3</sub> トレンチ



⑥D<sub>4</sub> トレンチ



⑦D<sub>2</sub> トレンチ



⑧D<sub>3</sub> トレンチ（南）



1 a



正 面

1 b



側 面

1 c



背 面

- 16 -

◎ { 現存高 × 最大幅 × 器 厚 }

- この土偶は、D地区D<sub>2</sub>トレンチ南側の盛土下I層より出土したものである。
- 頭部と胴下半を欠失しているが、首部の刺突文・背部の平行沈線文から「大洞C<sub>1</sub>式」期の土偶である。
- 胎土に砂粒を多く含みやすく、焼成もあまり良くないもので、色調は灰褐色である。

1 a



1 b



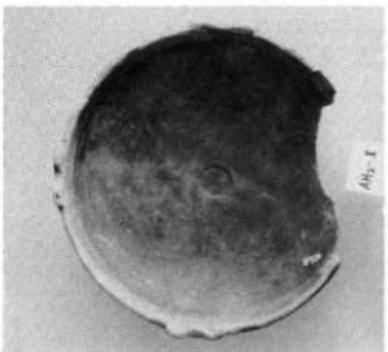
— 1 —

正 面

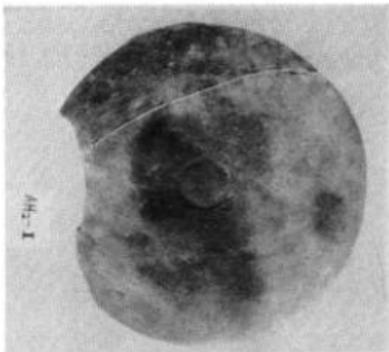
背 面

◎ { 現存高 5.6cm × 最大幅 3.82cm × 器厚 1.8cm }

- この土偶は、計測値が示すように小形の「大洞C<sub>2</sub>式」土偶である。
- 小形ながら遮光器土偶で目が大きく、体部の施文も力強い曲線文主体の文様である。
- 脚部下を欠失しているが、胎土も良く、焼成も堅緻なもので色調は黒褐色を呈する。



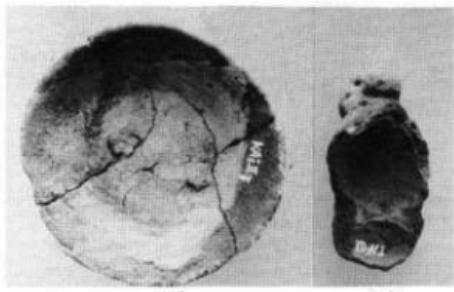
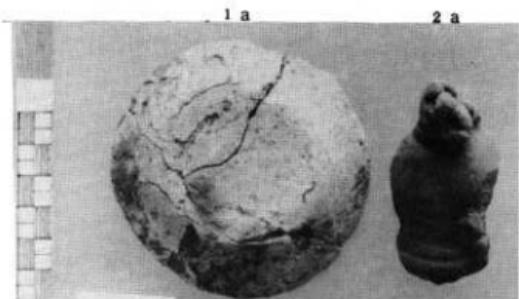
内 面



裏 面

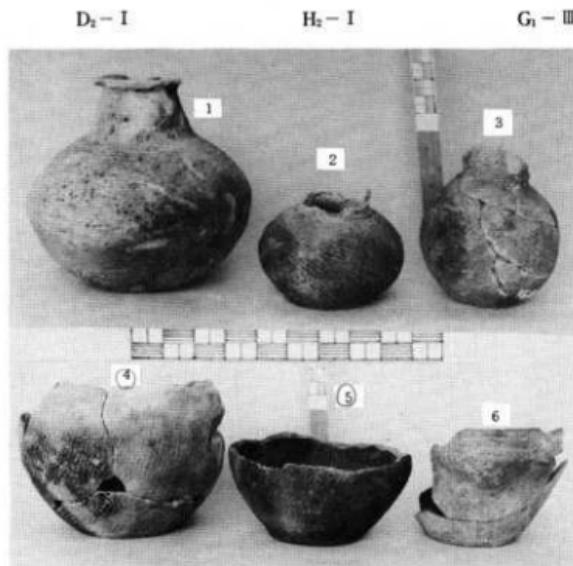
◎ { 口 径 × 器 高 × 底 径 × 器 厚 }

- このものは、「大洞C<sub>2</sub>式」精製皿形土器である。一部欠失しているが、4対の小突起を口縁に付すもので、他は無文である。
- 胎土・焼成とも良く、灰黒色を呈する。



◎( 口径 8.2 cm )  
• この 1a・1b としたものは  
壺形土器の底部である。

◎( 現存高 6.7 cm )  
• 2a・2b としたものは、あまり類例  
のない蓋形土器である。  
• 2a 下端の口縁に「大洞C<sub>1</sub>式」のメル  
クマールである刻目文が施文されてい  
るものである。



	口 径	×	器 高	×	最大幅	×	底 径	×	器 厚
◎〔壺形土器〕	1 =	4.3 cm		9.1 cm		9.8 cm		3.2 cm	0.5 cm
	2 =	3.1 cm		4.9 cm		6.6 cm		3.7 cm	0.5 2 cm
	3 =	0 cm		7.3 cm		6.1 5 cm		2.6 cm	0.4 cm

- 1は「大洞C<sub>2</sub>式」壺形土器である。このものは、胴部に細沈線による曲線文が施文されるものである。
- 2・3は、上記の計測値のように小形の壺形土器で、器形から見て、「大洞C<sub>2</sub>式」である。
- 4・5・6は鉢形土器で、4は球形胴部をもつものである。



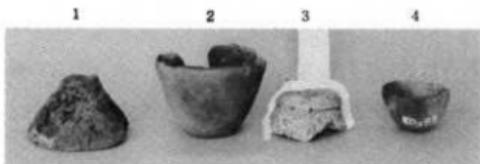
- 上段は、鉢形・壺形土器の欠損品である。
- 下段は、底部各種でいずれも小形である。

〔A地区H<sub>2</sub>グリット出土、土器〕

写 7

## 〔各地区出土、土製品等〕

写 8



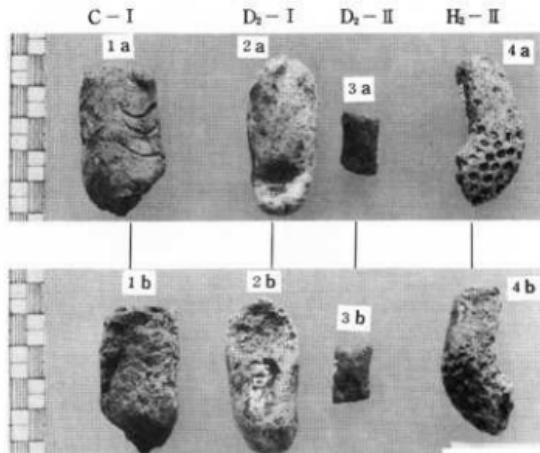
◎〔鉢形土器〕 2 = { 口 径 × 器 高 × 底 径 × 器 厚 }

$$2 = \{ 5 \text{ cm} \times 3.7 \text{ cm} \times 2.2 \text{ cm} \times 0.4 \text{ cm} \}$$

$$4 = \{ 3.2 \text{ cm} \times 2.2 \text{ cm} \times \text{丸} \text{ 底} \times 0.3 \text{ cm} \}$$

• 1は台付土器の台部、3は袖珍土器の台部、2は袖珍土器で鉢形、4も袖珍土器である。

• 下段は底部例である。



$$\odot \left\{ \begin{array}{l} 1 = 4.7 \text{ cm} \times 2.5 \text{ cm} \\ 2 = 5.1 \text{ cm} \times 2.3 \text{ cm} \\ 3 = 2 \text{ cm} \times 1.1 \text{ cm} \\ 4 = 4.8 \text{ cm} \times 1.8 \text{ cm} \end{array} \right\}$$

• ここに掲げたもののうち、1a、1bは土偶破片で「後期十腰内I式」、2a、2bは、これも土偶の胸部と見られるが型式は不明。

• 3a、3bは、小鉄片で（沼鉄鉢）と思われる。

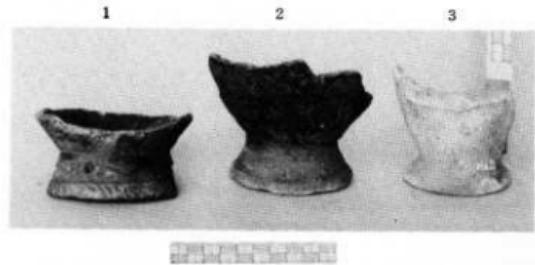
• 4a、4bは、土偶胸部と思われる。「十腰内I式」である。



- 1は、「大洞C<sub>2</sub>式」壺形土器で、朱塗りである。  
曲型的なC<sub>2</sub>式の施文がある。
- 2は、「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器で台付の可能性もある。

[ 各地区出土、台付土器台部 ] その 1

写 10



— 12 —

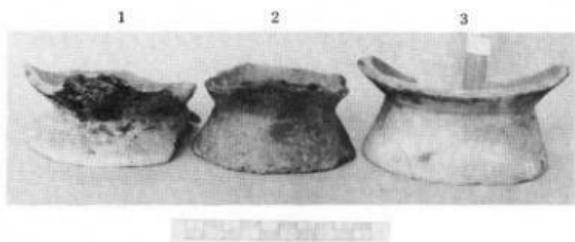


4 5 6

- ここに掲げたものは台付鉢形土器の台部である。（すべて粗製土器）
- 1・2・3は「大洞C<sub>2</sub>式」と思われる。
- 4・6は「大洞C<sub>1</sub>式」であろう。
- 5は「大洞A式」または「同C<sub>2</sub>式」後半以降のものであろう。

[ 各地区出土、台付土器台部 ] その 2

写 11



4 5 6

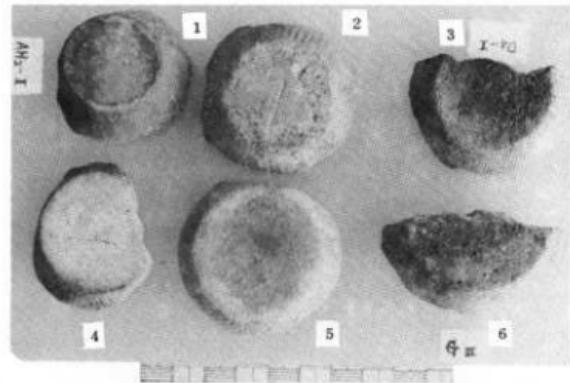
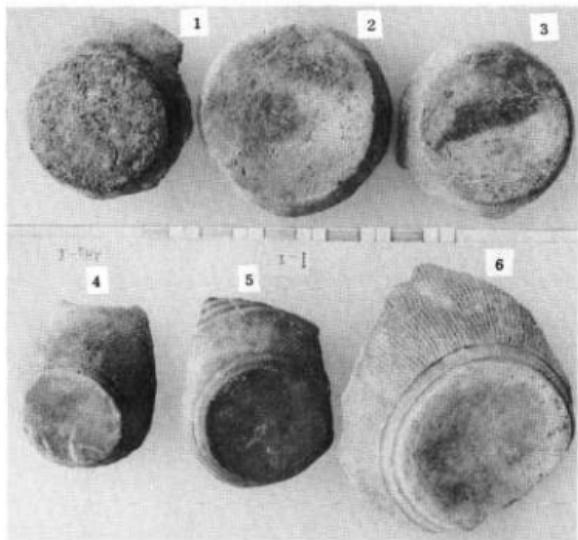
- 1・2・3は「大洞C<sub>2</sub>式」台付鉢形土器台部。
- 4・5・6は「大洞A式」精製台付鉢形土器の台部である。  
( 1・2・3は粗製 )

[ 各地区出土、底部 ] その 1

写 12 [ 各地区出土、底部 ] その 2

写 13

AH<sub>2</sub>-I



[ 1 ~ 6 ] → ここに掲げたものは、底部各種である。いずれも縄文時代晚期のものである。

• ( 1 ~ 4 ) は A 地区 H<sub>2</sub> グリット I 層出土、( 5 ~ 6 ) は A 地区 I グリット I 層出土である。

• ( 1 ~ 3 ) は平底、( 4 ~ 6 ) はやや上げ底である。

[ 1 ~ 6 ] → ここに掲げたものは、底部各種である。いずれも縄文時代晚期のものである。

• ( 1 ~ 2 ~ 4 ~ 5 ) は A 地区 H<sub>2</sub> グリット I 層出土、( 3 ~ 6 ) は A 地区 G<sub>1</sub> グリット III 層出土である。

• このうち ( 2 ~ 4 ~ 6 ) は平底、( 1 ~ 3 ) は上げ底のものである。

〔完形・復原土器〕 その1

写 14

①縄文時代晚期「大洞A式」台付鉢形土器



14.0×9.9×7.8×0.8 cm

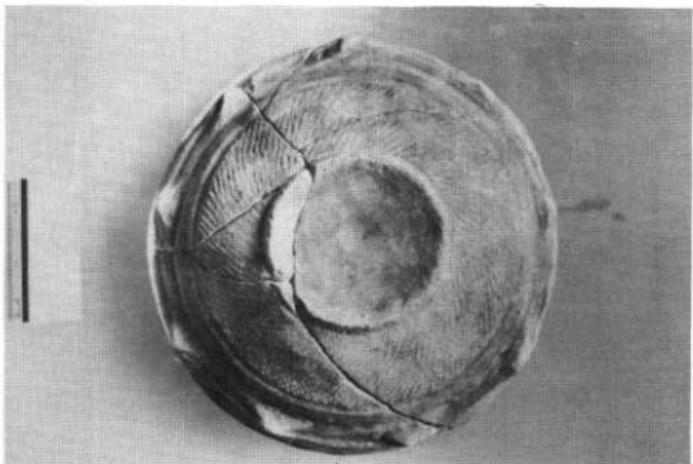
(AH<sub>2</sub>-II出土)

②縄文時代晩期「大洞C<sub>1</sub>式」台付鉢形土器（復原・浅木）



口径 14.9 × 器高 10.2 × 台径 8.3 × 器厚 1.0 cm

(AH<sub>2</sub>-II出土)



14.5×5.1×5.9×0.9

( AH-II )

②

Q



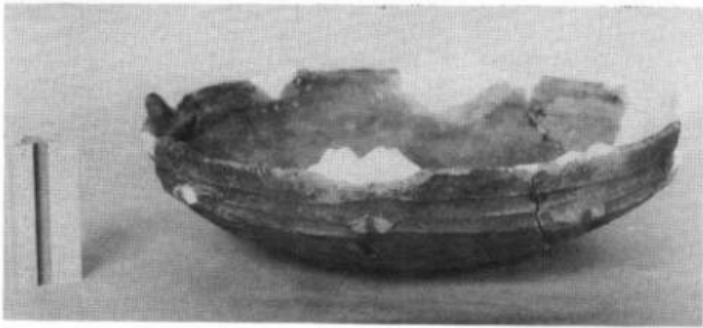
( 竜口径×器高×底径×器厚→各ページ共通 )



19.6×5.4×4×0.8

(AG<sub>1</sub>-IV出土)

②



[ 縄文時代晩期「大洞C<sub>2</sub>式」土器 ] ①・②・③( 復原・浅木 )

写 17

①碗形土器

②碗形土器



( AH<sub>2</sub>-II 出土 )

7.7×2.2×丸底×0.5

8.7×2.7×丸底×0.7

③壺形土器



( AH<sub>2</sub>-II 出土 )

7.4×13.7×7.1×0.9

①縄文時代晚期「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器（復原・浅木）

写 18



12.6×13.1×6.35×0.52

(AG<sub>2</sub>-II出土)

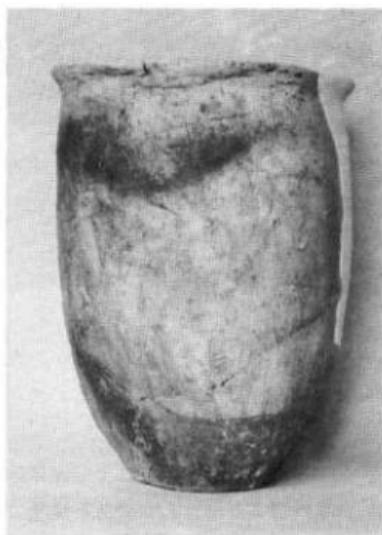
②縄文時代晚期「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器



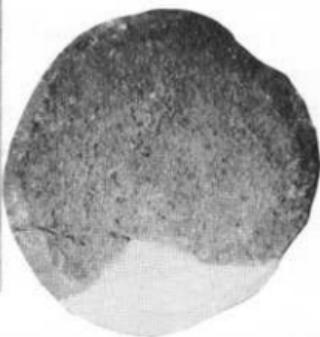
11.8×7.7×0×0.45

(AH<sub>4</sub>-I出土)

① 瓢形土器



② 底面



18.7×24.6×8.9×1.0

## [1] 調査に至る経過と調査要項

### (a) 調査に至る経過

昭和49年土地改良計画により本遺跡の一部がその範囲の付近に所在するため、第一次試掘調査を実施した。

- ・その結果については、「觀音林遺跡」第一次発掘調査報告書として既に報告されているところであるが、本遺跡は第一次試掘調査の段階では、縄文時代晚期「大洞C<sub>2</sub>式」土器を主体とする一大遺跡であることが判明した。
- ・以後、本遺跡の推移について意を用いていたところ、昭和58年本遺跡の所在する舌状台地の一部が開畠されつつあるため、市教育委員会では本格的発掘計画をたて、第二次発掘調査を実施した。

その結果の詳細については、「觀音林遺跡」第二次発掘調査報告書として報告したところである。

この報告書において、第一次発掘調査で判明した縄文時代晚期の遺物のほか、歴史時代（平安時代および中世）の遺物・遺構を含む新文化層を確認できたものである。

・本遺跡の範囲は、約1haの広さをもつもので、一シーズンの発掘ではその全体像を把握することがむずかしく、かつ開畠計画が台地西端より進行しつつある現状である。

そのため五所川原市教育委員会では、地主である長尾良治氏の御協力により第三次発掘調査を実施するに至った次第である。

### (b) 調査要項

①発掘主体者 五所川原市教育委員会

代表 教育長 鈴木 太左衛門

②主管課 五所川原市教育委員会社会教育課

○課長 寺田 勇

○課長補佐 時田 武則

○主査 中村 健

○主事 佐藤 文季

③発掘担当者 • 日本考古学協会々員 新谷 雄藏

④調査員 • 日本地学教育学会々員 川村 真一

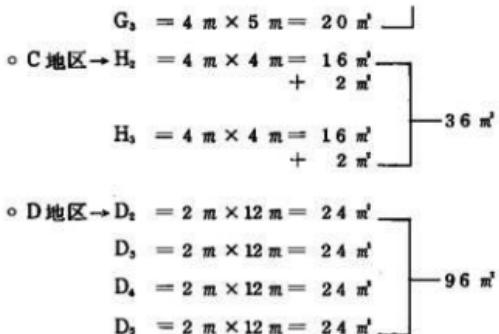
• 北奥古代文化研究会員	太田文雄 岩崎繁芳 小山英治 菊池由紀子 伊藤昭雄 小野雅史 桜井有一
卒副調査員	弘前学院大学生 青森職業訓練短大生 五所川原工業高等学校生 弘前高等学校
卒特別参加	北奥古代文化研究会員 郷土史研究家 飯詰小学校長
卒特別参加	青森山田高等学校 青森考古学会員 同校生徒 4 名
☆五所川原市内小中学校	飯詰小学校、松野木小学校、五所川原第一中学校、五所川原第四中学校児童・生徒

### (C) 発掘面積と発掘法

☆発掘面積 252 m<sup>2</sup>

$$\begin{aligned}
 \circ A \text{ 地区} \rightarrow G_1 &= 4 \text{ m} \times 4 \text{ m} = 16 \text{ m}^2 && \\
 G_2 &= 4 \text{ m} \times 4 \text{ m} = 16 \text{ m}^2 && \\
 H_2 &= 4 \text{ m} \times 4 \text{ m} = 16 \text{ m}^2 && \\
 H_4 &= 2 \text{ m} \times 4 \text{ m} = 8 \text{ m}^2 && \\
 i &= 2 \text{ m} \times 2 \text{ m} = 4 \text{ m}^2 && \\
 \end{aligned}
 \quad \left. \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right\} 60 \text{ m}^2$$
  

$$\circ B \text{ 地区} \rightarrow EF = 4 \text{ m} \times 4 \text{ m} = 16 \text{ m}^2 & \\
 F = 2 \text{ m} \times 3 \text{ m} = 6 \text{ m}^2 & \\
 G_2 = 3 \text{ m} \times 6 \text{ m} = 18 \text{ m}^2 & \\
 \end{array} \quad \left. \begin{array}{l} \\ \\ \end{array} \right\} 60 \text{ m}^2$$



卓発掘法 グリット法による。

#### (d) グリットの設定について(第2・3図)

観音林遺跡は、松野木部落の南端に所在する舌状台地にあり、この台地は標高約33.8mの南西に突出する台地である。

この台地は、現在雜木林となっているが、台地上に第2図-1に示すように発掘区をA・B・C・Dの4区に設定した。

以下、各発掘区ごとに第1～第2次発掘の状況を含め、発掘区ごとにその経緯を述べることにする。

##### • A地区(第2・3-1図)

第一次試掘調査(昭49)は、遺跡の所在する松野木台地の先端部より約300米程東側、台地の南斜面に旧道に接してグリットF<sub>2</sub>を設定試掘調査をした。(第3図-1)、その結果出土した遺物、特に土器群については〔表1〕に示したとおりである。

第二次発掘調査は、昭和58年、第3図-1に示すとおり、第一次試掘調査グリットであるF<sub>2</sub>グリットの東側にG<sub>3</sub>・G<sub>4</sub>グリットを設定し発掘調査を実施した。

このA地区とした発掘区の文化層は、若干の「十腰内I式」土器を下層に包含し、上層の包含層は縄文晩期を主体とする包含層であった。

第三次発掘調査においては、第二次調査の発掘区であるG<sub>3</sub>・G<sub>4</sub>グリットの南側および東側に、第3図-1に示すようにG<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>・H<sub>1</sub>・H<sub>2</sub>・iを設定し発掘調査を実施した。その結果については、以下に述べるとおりである。

##### • B地区(第2図・第3図-2)

第一次調査においては、このB地区は調査せず第二次発掘調査（昭58）において発掘区を設定した。

第二次発掘調査においては、第3図-2に示すとおり、G<sub>1</sub>-21・22を中心とするF-21・22、G<sub>2</sub>-21・22の一部を拡張して発掘調査をした。

その結果、このB地区では縄文時代後期・晩期の土壙群と土師器、および歴史時代の遺物・遺構が複合する地区であることが判明した。

第三次調査においては、第3図-2に示すとおり、E-21・22、F-21・22およびG<sub>1</sub>-21・22、G<sub>2</sub>-21・22に拡張し、さらに遺構の検出と確認につとめた。その結果については後述する。

#### • C地区（第2図・第3図-3）

このC地区も第二次調査において発掘区を設定した。すなわち第3図-3に示すとおり、H<sub>1</sub>-12・13・14区の南側2m×12mをトレンチとして発掘した。またH<sub>1</sub>-14 H<sub>2</sub>-14をグリットに設定して発掘したのである。

その結果、この地区においてカマドの所在を予想させる焼土の堆積と堅穴住居址の壁面の一部を検出した。

そのため第三次調査においては、第3図-3に示すように、第二次調査の発掘区の一部を含めて、H<sub>1</sub>-13、H<sub>2</sub>-13を中心にH<sub>1</sub>-14、H<sub>2</sub>-14の一部を拡張し住居址の検出につとめた。その結果については後述のとおりである。

#### • D地区（第2図・第3図-3）

このD地区も第二次調査より発掘区を設定した地区である。このD地区は堀状遺構を解明する目的で設定したもので、第二次調査では、2m×12mのトレンチを設定し堀状遺構の南端に東西にチレンチを入れ、D<sub>1</sub>トレンチとした。（第2図参照）

その結果、堀の形状が類例を見ない掘り方であったので比較検討の必要を痛感した。

よって第三次調査では、第2図-1に示す位置に第3図-3に示した基本トレンチをD<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>・D<sub>5</sub>の4トレンチを設定し発掘区とした。その結果については後述する。

## 〔2〕発掘日誌抄

◎昭和59年7月30日 (月) 天気 晴

午前9:00 作業開始。本日の作業は、B地区・A地区・D地区より行う。

B地区は昨年発掘した土壤群および土壘を再度掘り返えし、再検討する作業である。

A地区は、草刈りとグリットの設定を行う。また、D地区は、草刈りとD<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>のトレンチの設定を行う。(第2図-1)

調査員、作業員を三班に分け直ちに作業にかかるも、A地区・D地区は雑木や雑草が多く作業は苦しい。

◎7月31日 (火) 天気 快晴

午前9:00 作業開始。本日の作業は、B地区掘り返えし完了の予定。A地区・D地区は草刈りを完了し、トレンチを設定、発掘にかかる。A・D地区は表土の剥ぎとりを行う。

◎8月1日 (水) 天気 快晴

午前9:00 作業開始。本日の作業は次のとおりである。

①B地区は昨年度の発掘区の掘り返えし、午前で完了する予定。

②A地区H<sub>4</sub>グリットの荒掘りを完了する。

③D地区D<sub>2</sub>トレンチの表土を剥ぎ取り、精査する。

④C地区も昨年度のトレンチ掘り上げ、本年度設定のH<sub>2</sub>-13・H<sub>3</sub>-13の荒掘りを行う予定とする。

すなわち、本日より全員を四班に編成し、それぞれA・B・C・D地区を分担し併行して作業をすすめる。

出土品は、D<sub>2</sub>トレンチ(以下D<sub>2</sub>Tと略記する)より袖珍土器1、土師器片・縄文土器片の出土があり、A地区H<sub>2</sub>I層より後期土器片の出土あり、大洞C<sub>2</sub>式土器が多い。

また、C地区より石槍1、土師器片、後期・晚期の土器片がI層より出土する。

午前で各地区ともほぼ予定どおり作業が進む、午後もそのまま掘り下げることとする。

遺物の出土が多くなる。今日1日で6箱分の出土である。遺物は土器・石器であるが、大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式がA地区に多く、B地区は数片程度である。C地区は、後期十腰内I式土器・大洞C<sub>2</sub>式土器が多く、少量の土師器がI層に混在して出土する。石器は少ないが特に石礫の出土が目立つ。全員に注意する。

◎8月2日 (木) 天気 快晴

午前9:00 作業開始、本日の作業はC地区は第I層を掘り下げる。この地区のI層は深い。

H<sub>2</sub>-13区において、カマドの一部と煙出し部を検出する。壁面の一部が姿をあらわしてくれる。

このC地区担当は、応援にかけつけてくれた高橋潤教諭と青森山田高校生を中心とする。

B地区、本日は作業せず、その人員をC地区に投入し、厚い第I層を剥ぎとる。D地区、D<sub>2</sub>Tを精査しセクション図を作成する。セクションでは、盛土の下層に第I層(原黒土層-第V層)が堀の北端に残っており「大洞C<sub>1</sub>式」土器を包含している。このD<sub>2</sub>T北端のI層はC<sub>1</sub>式土器の出土が多い。

A地区、G<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>-1のI層に掘りすすむもきわめて固い。晩期の土器が多い。特にH<sub>2</sub>グリットでは「大洞A式」土器が第I層で多く出土する。今日は新しくH<sub>4</sub>グリットを設定して表土の剥ぎとりを行う。

D地区、新しくD<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>トレンチを堀を横断して南北に設定、表土より剥ぎとりにかかる。

本日の出土遺物は、完形壺形、スクレーパー、復原可能土師器壺等である。この壺形土師器は、C地区堅穴住居址のカマド右袖に横位で出土した。住居址の年代を知る資料である。

◎8月3日 (金) 天気 快晴

本日も9:00より作業開始。今日の作業はA地区H<sub>2</sub>・H<sub>4</sub>の掘り下げを続行する。H<sub>2</sub>区は第II層に、H<sub>4</sub>はI層を掘り下げる。遺物の出土はH<sub>2</sub>に多くH<sub>4</sub>に少ない。H<sub>2</sub>第II層下端から小形遮光器土偶が脚部を失して出土した。「大洞C<sub>2</sub>式」である。

B地区は土壤群の測量を行う。昨年の土壤群に加えて、G<sub>2</sub>・G<sub>3</sub>-23区で新しく検出した土師器片を埋蔵した土壤を実測するためである。(五所川原市建設課によ

る。)

C地区は発掘区を清掃し遺構の検出に努力する。

D地区では、D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>トレンチを掘りすすむ。須恵器片数片の出土があった。

◎8月4日 (土) 天気 快晴

A地区、H<sub>2</sub>の第Ⅱ層を掘り下げる。H<sub>4</sub>はⅠ層掘り下げ続行。H<sub>2</sub>Ⅱ層上面に火山灰層がレンズ状にあり要注意である。(二次堆積か?)

また、「大洞C<sub>2</sub>式」朱塗り壺形土器が出土する。

C地区、煙出し部・カマド・床面を精査する。柱穴状ピットを3コ検出する。そのうち1コは径60cmあり主柱穴であろう。

D地区、D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>トレンチの掘り下げを本日で終了する。D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>トレンチ北側に落込みと柱穴状ピットを検出する。このピットの性格解明を追求する必要がある。

出土遺物は、土器片約10箱、「後期十腰内Ⅰ式」「晚期大洞C<sub>2</sub>・A式」が多い。

◎8月6日 (月) 天気 快晴

本日の作業は、つぎのとおりである。

A地区、H<sub>2</sub>・H<sub>4</sub>をⅠ層よりⅡ層へ掘りすすむ。石器の出土も多くなる。

B地区、土壙7号・3号にサブトレンチを入れ精査する。地山を掘って造ったもので貼りつけ粘土等はないものと認められる。

C地区、堅穴住居址西壁面下の床面上に炭化木材片を検出する。カマド内の焼土を除去する。カマドの天井部が落込んでいる。天井部を一部にもち煙出し部に通じる構造と思われる。

D地区、新しくD<sub>5</sub>トレンチを設定、草刈り後荒掘りを実施する。

◎8月8日 (水) 天気 快晴

本日の作業、A地区、G<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>グリット、iグリット設定。草刈り・表土剥ぎ取りを行い、第Ⅰ・第Ⅱ層まで掘りすすむ。

B地区は発掘を終了し、実測者のみ残す。C地区は、精査のみ残すため作業員全員をA地区、D地区D<sub>5</sub>トレンチに集中する。

A地区ではG<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>・H<sub>2</sub>・H<sub>4</sub>iグリットの発掘をすすめる。

H<sub>2</sub>グリットはⅡ層からⅢ層へ、H<sub>4</sub>グリットはⅡ層掘り下げ、iグリットは草刈り、

表土剥ぎ、第Ⅰ層へとすすむ。

H<sub>2</sub>グリットより凝灰岩の小玉が多く出土する。相変らずA地区は晩期の土器のみ出土する。「大洞C<sub>2</sub>式」「同A式」である。

◎8月9日 (木) 天気 曇

本日の作業はつぎの予定である。すなわち、A地区、G<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>・iグリットは第Ⅲ・Ⅳ・V層へ、H<sub>2</sub>・H<sub>4</sub>は第Ⅲ・Ⅳ層へと掘りすすむ。次第に包含層は固くなる。

H<sub>2</sub>グリットより石碎・骨片、G<sub>1</sub>より骨片・石皿出土。出土土器はやはり晩期が中心である。

B地区、発掘なし。C地区は住居址中央に南北6m幅50cmのサブトレンチを入れ、住居址の北壁を検出する作業をする。その結果、東西にわたる溝を検出。それを追し住居址壁面内側下に周溝のあることを確認する。

D地区は、D<sub>2</sub>トレンチを掘り下げるとともにセクション図を作成する。

◎8月10日 (金) 天気 快晴

A地区、昨日につづきG<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>・H<sub>2</sub>・H<sub>4</sub>・iグリットの掘り下げ、午後は発掘区を清掃セクション図を作成する。

B地区は発掘なし。C地区は住居址の精査を行う。また、D<sub>2</sub>トレンチとC地区住居址との関連を追求するため、CDトレンチを新しく設定2m×4mを南北にとり掘りすすみ第Ⅱ層下位で、縄文時代前期「円筒下層a式」土器が出土した。また、この土器は土壤上ピット上面で出土したが詳細は明年に残される。

A地区、G<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>グリットは一部第Ⅶ層まで、H<sub>2</sub>グリットは第Ⅳ層まで、H<sub>4</sub>グリットは第Ⅲ層まで、iグリットは第Ⅲ層まで掘り下げたが、各グリットとも下層に包含層が残るようである。これらのグリットは明年また掘り下げたい。

◎8月11日 (土) 天気 晴

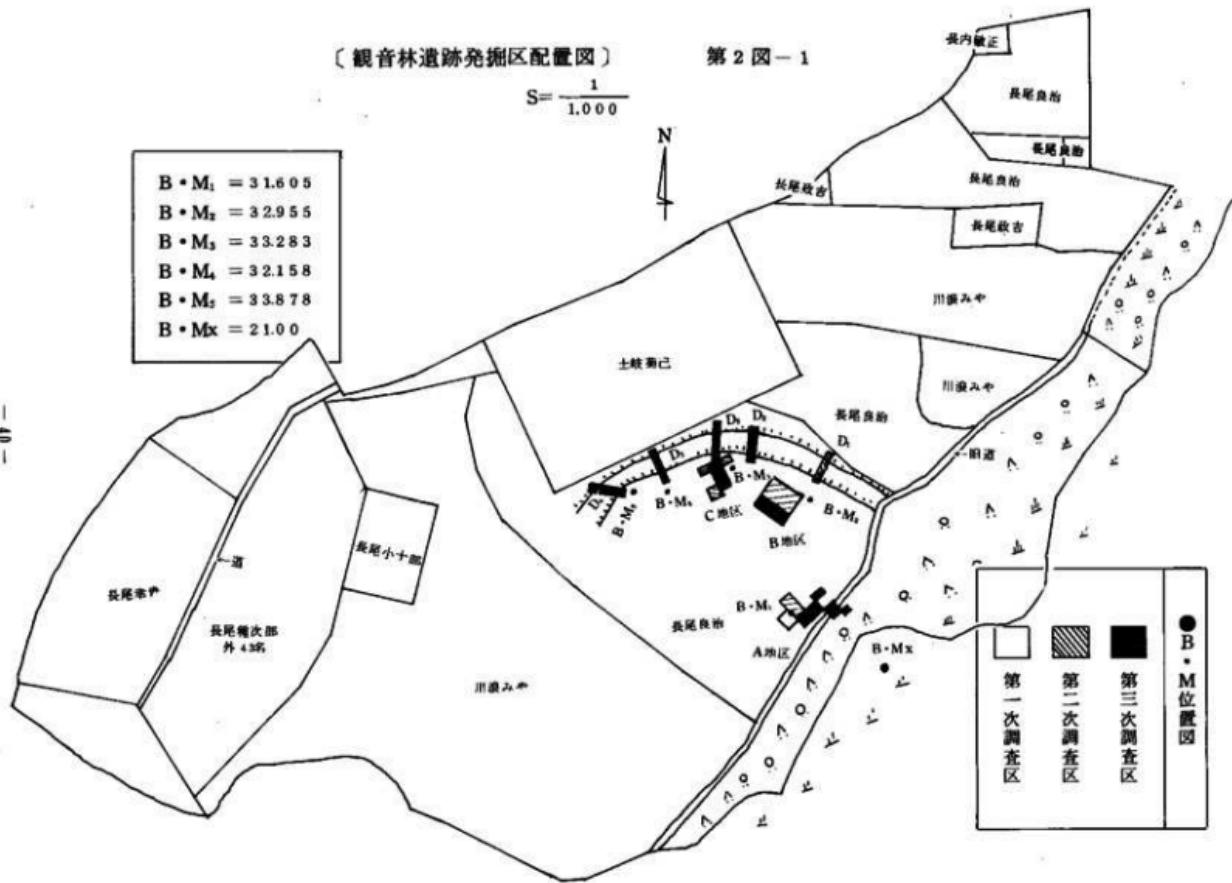
本日は、埋めもどし作業を行う。A地区・C地区は作業量が多い。

やはり觀音林遺跡は、縄文時代前期・中期・後期・晩期そして歴史時代平安末頃までの遺物・遺構をもつ複合遺跡であった。

( 鏡音林遺跡発掘区配置図 )

第2図-1

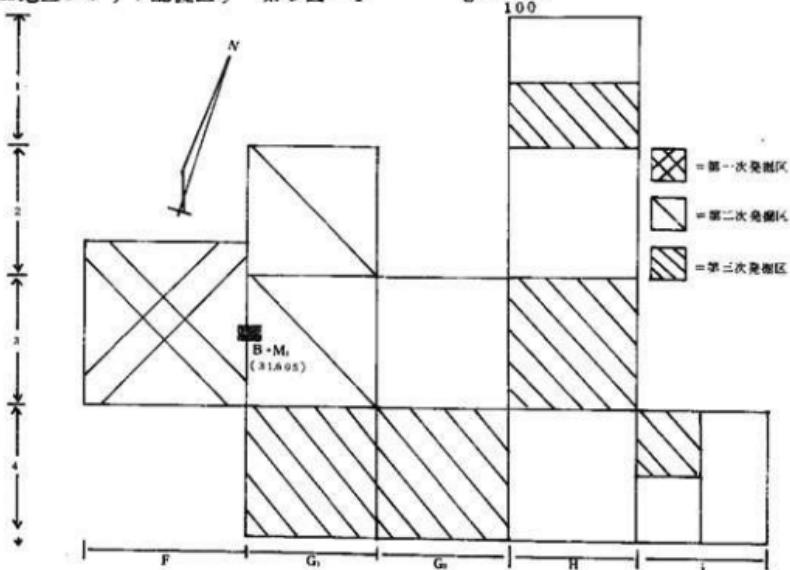
$$S = \frac{1}{1,000}$$



〔銀音林遺跡位置図〕 第2図-2

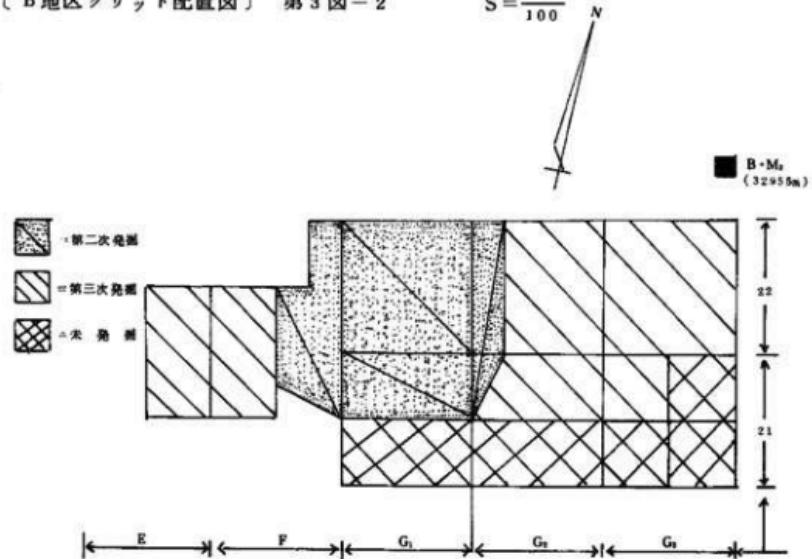


[ A 地区 グリット配置図 ] 第3図-1



$$S = \frac{1}{100}$$

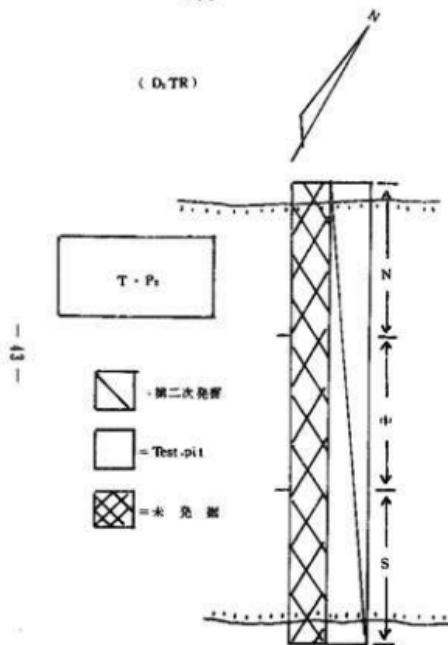
[ B 地区 グリット配置図 ] 第3図-2



$$S = \frac{1}{100}$$

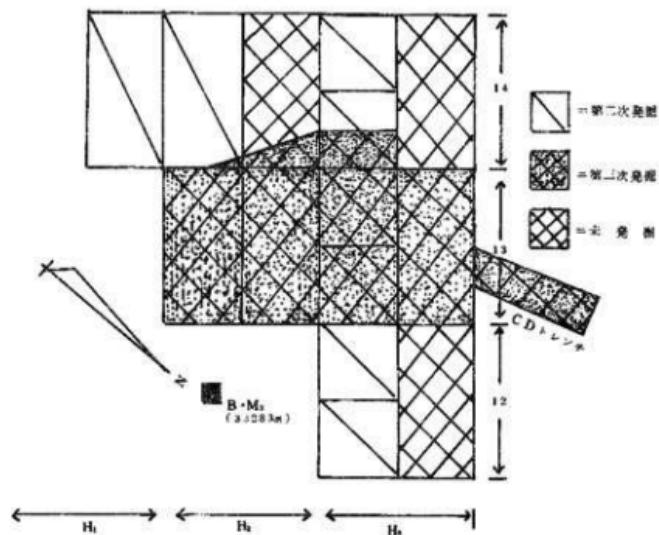
[D地区 トレチ基本パターン]

$$S = \frac{1}{100}$$



[C地区 グリット配置図] 第3図-3

$$S = \frac{1}{100}$$



### 〔3〕 地 形 ・ 層 序

#### (1) 地形・層序について

本遺跡は、五所川原市の東方約5km、松野木部落の南端にあって、五所川原駅前より弘南バスにて約20分、南松野木バス停留所下車、約10分の西方舌状台地に位置する。

この台地は、最も高い地点で標高約33283m (B+M<sub>3</sub>) であり、遺跡南部の水田面では、約2100m (B+M<sub>2</sub>) であって、西南方向に突出する台地である。

この地域には、松野木川が県道福山・五所川原線を横切っており、この周辺には、長者森山・境山・鶴野等の遺跡が梵珠山系の山麓に点在している。

松野木地区の地形を大きく区分すると、東方から西方へ向って、中山山脈の南端を占める梵珠山地（標高500～300m）、それに続く大沢迦丘陵（標高200～100m）前田野目台地（標高70～30m）および津軽平野の四つに区分することができる。

この松野木台地は、既述の前田野目台地上に位置しており、北は天神川、南は松野木川によって挟まれた部分を占められている。

前田野目台地は、海成段丘で津軽平野の南東縁に原子・野里・松野木・飯詰と連続して分布しており、この台地を梵珠山地に源をもつ小河川が浸食によって谷をつくり寸断している。この開析谷には境ノ沢溜池・長橋溜池など多くの溜池がつくられている。

前田野目台地は面高度によって、3面に細区分ができる。すなわち、標高50～70mのⅠ面、30～40mのⅡ面、20～30mのⅢ面に分けられる。松野木地区は、このⅡ面上にある。

観音林遺跡は、この松野木台地の南西端部分にある。この台地は、その北側を流れる松野木川の浸食によって舌状台地となっており、標高は25～30mを示しⅡ面に連続している。

遺跡の南方一帯は小規模ながら松野木川およびその支流の形成した扇状地となっている。

なお、遺跡の北側約0.3km付近を西流する松野木川は、津軽平野を北流して十川と合流するが、一部は境ノ沢溜池に注いでいる。

## (2) 地質および層序

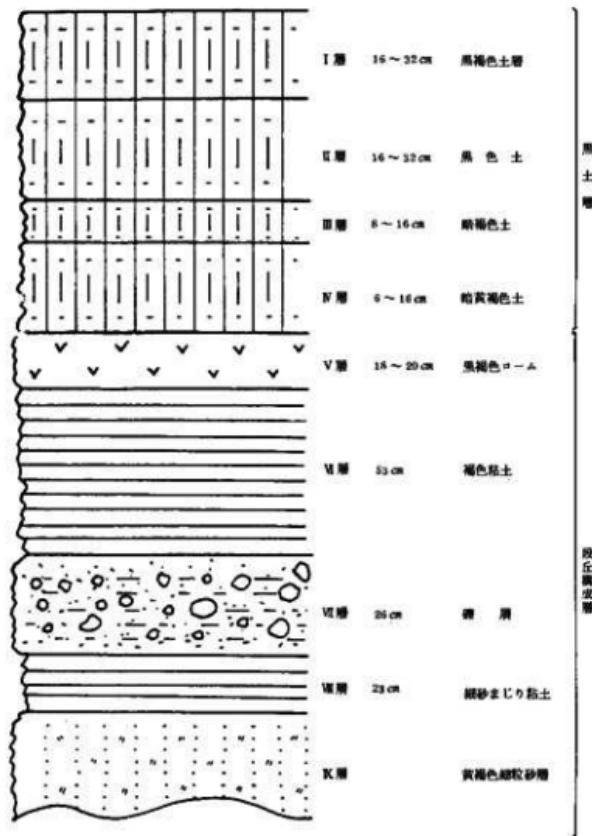
本遺跡の基本層序は、第4図-6に示すとおりである。

遺跡のベースをなすのは、V層のローム層で、遺物の包含層はⅠ～Ⅳ層である。V層～Ⅱ層までは段丘の構成層で遺物の出土とは直接的には関係ないが、遺跡内で発見された歴史時代のものと考えられる空堀の構造との関係から特に記載することにした。なおこの段丘の基盤をなすのはⅢ層の凝灰質細粒砂層である。

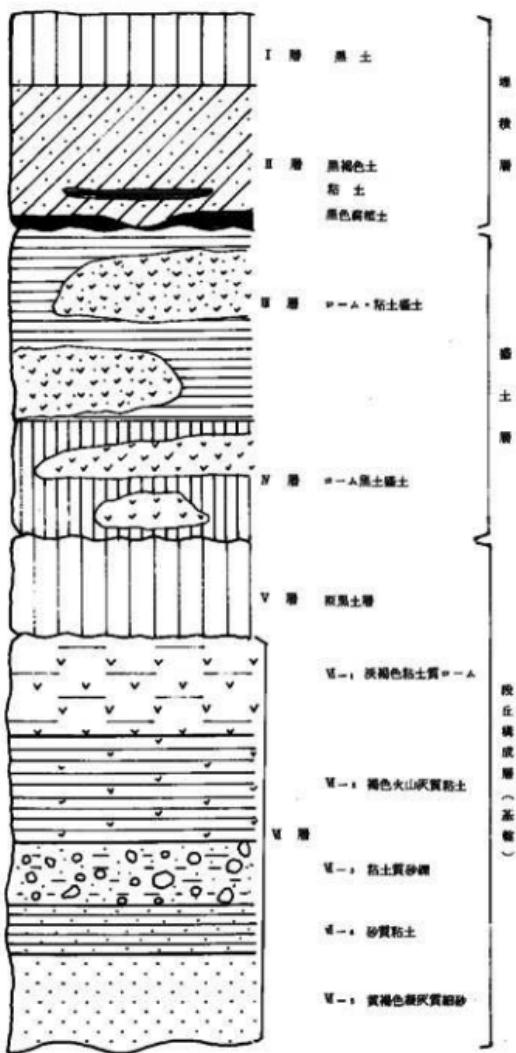
以下に各層の特徴を述べる。

- I層 黒褐色を呈しており、草木根が多数混入する腐植土で表土を形成する。
- II層 黒色土で粒子が細かく、さらさらしており直径1mm程度の粗砂を混入する。
- III層 黒色土に粘土が混入したもので、細砂を含み粘性がある。暗黄褐色を呈する。
- IV層 ローム層から黒土への漸移層で粘性が強く、暗黄褐色を呈する。
- V層 粘性の強い黒褐色均質ロームで、まれに石英粒がみられる。
- VI層 黄褐色で粘性の強い粘土である。
- VII層 粘土・砂および直径数cm程度の主に亜角礫からなる礫層で、段丘礫である。
- VIII層 凝灰質細砂まじりの粘土で、下層数センチはオレンジ色を呈する。
- IX層 遺跡をのせる段丘の基盤をなす層で、黄褐色凝灰質細粒砂層である。

[観音林遺跡基本層序図] 第4図-6



〔D地区壠状遺構基本層序〕 第4図-5



(注) V層=A・B・C地区では第I層。

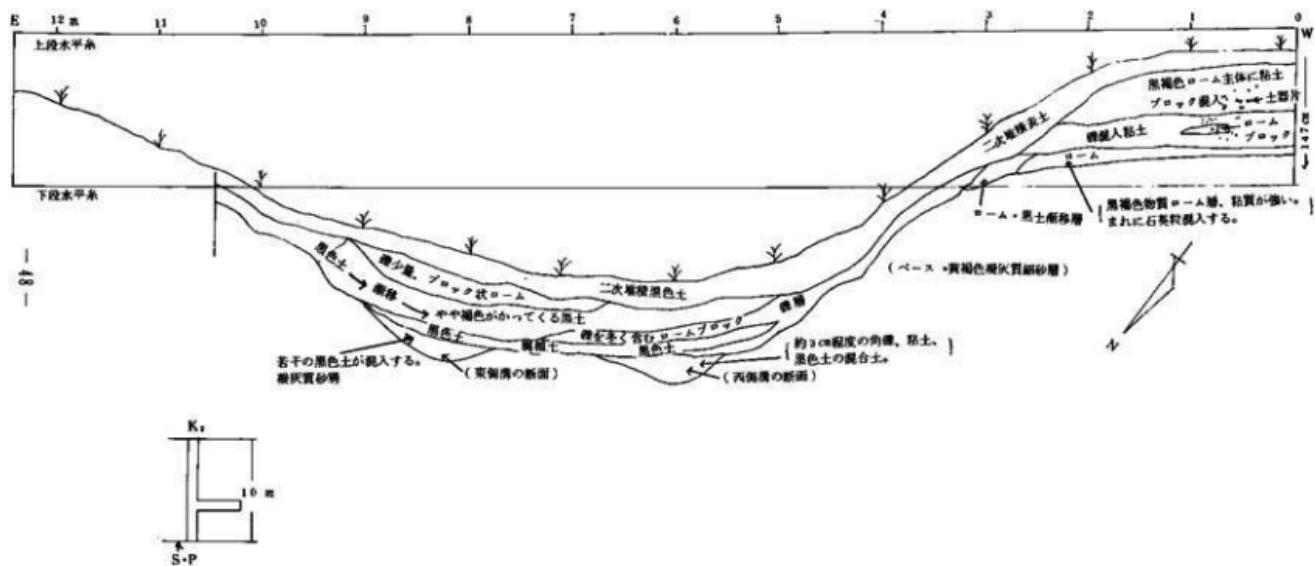
〔壠状遺構D<sub>1</sub>トレンチ南壁セクション図〕

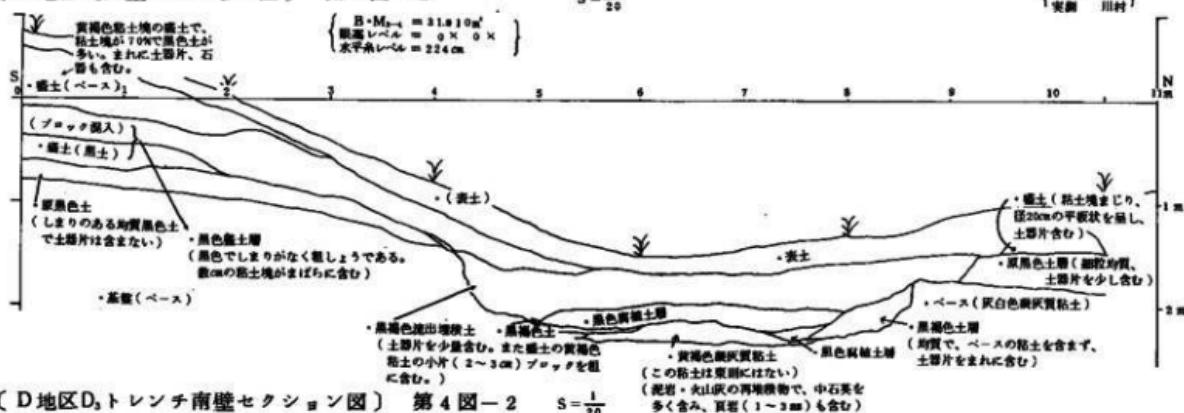
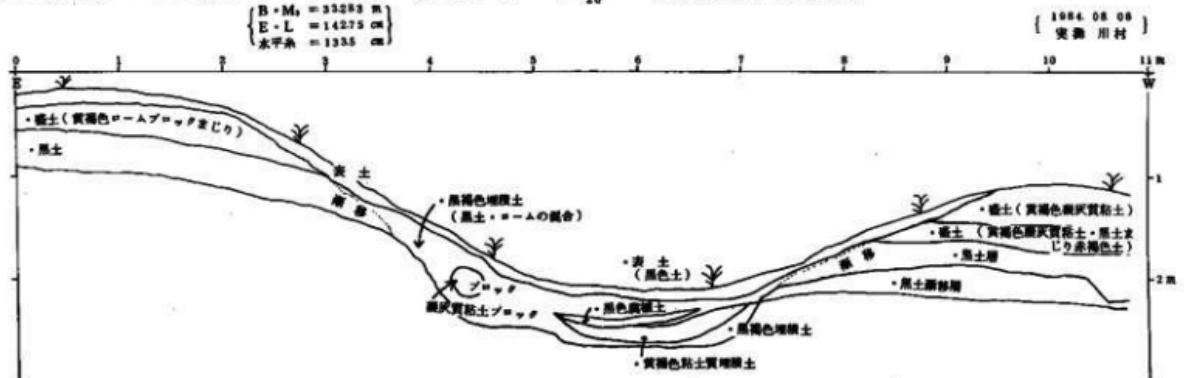
(第二次発掘調査) 参考図

$$S = \frac{1}{20}$$

$$\left\{ \begin{array}{l} B + M_1 = 293.4 \text{ m} \\ E + L = 1033 \text{ cm} \\ \text{水平系} \\ \text{上坡} = 103.5 \text{ cm} \\ \text{下坡} = 256.5 \text{ cm} \end{array} \right\}$$

830411 { 雜括書 用村  
用村・太田・臺灣

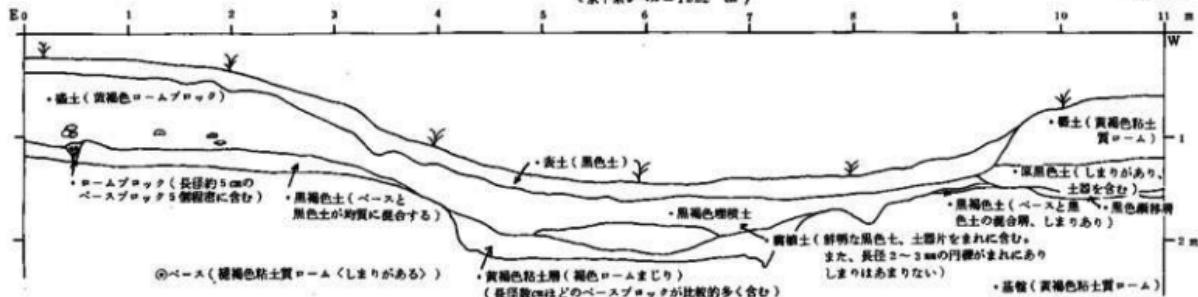


〔D地区D<sub>2</sub>西壁セクション図〕 第4図-1 $S = \frac{1}{20}$ (1959. 08. 09)  
実測 川村〔D地区D<sub>3</sub>トレンチ南壁セクション図〕 第4図-2 $S = \frac{1}{20}$ (1959. 08. 08)  
実測 川村

[D地区D<sub>4</sub>トレンチ東壁セクション図] 第4図-3

$$\left\{ \begin{array}{l} B \cdot M_s = 32.158 \text{ m} \\ \text{最高レベル} = 137.7 \text{ cm} \\ \text{水平偏差} = 122.2 \text{ cm} \end{array} \right.$$

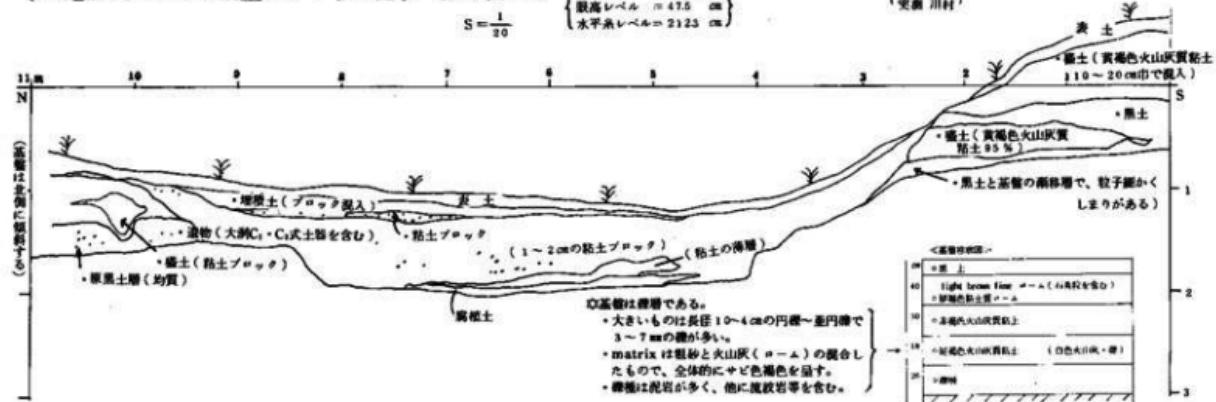
1984. 08. 04.  
1984. 08. 04.



(D地区D<sub>5</sub>トレンチ東壁セクション図) 第4図-4

$$S = \frac{1}{\sqrt{B \cdot M_3}} \quad \left\{ \begin{array}{l} B \cdot M_3 = 33878 \text{ cm} \\ \text{最高レベル} = 47.5 \text{ dB} \\ \text{水平差レベル} = 21.23 \text{ dB} \end{array} \right\}$$

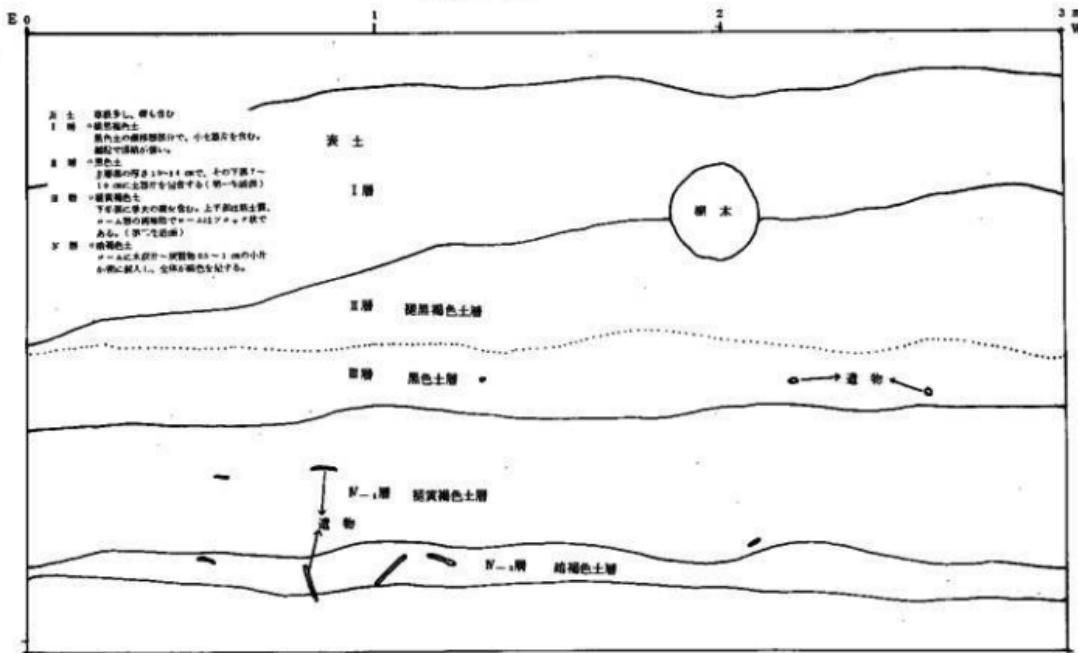
1984. 08. 09

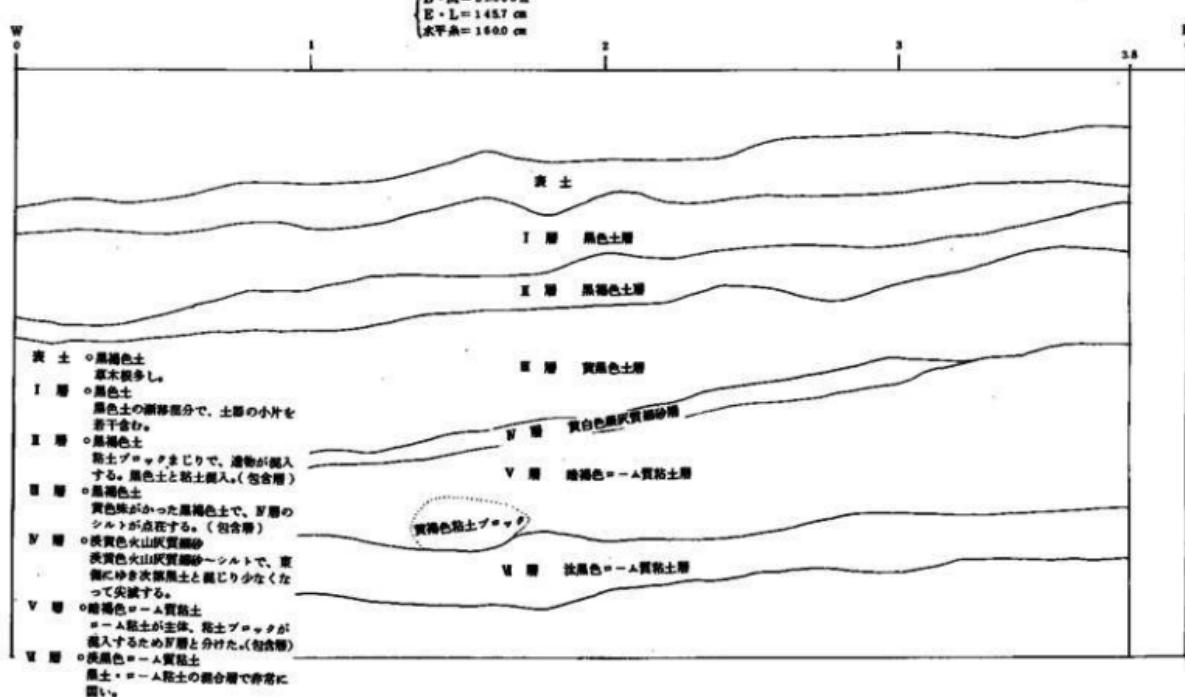


[A地区Gグリット北壁セクション図] 第4図-7  $S=\frac{1}{10}$

B・M = 318.0 m  
E・L = 145.7 cm  
水平差 = 332.0 cm

(1959.08.1)  
安井 田村



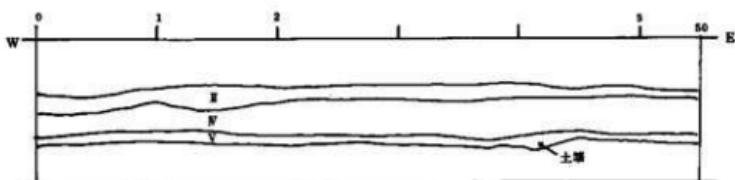
〔A地区H<sub>4</sub>グリット北壁セクション図〕 第4図-8 $S = \frac{1}{10}$ (1984. 08. 12)  
実測 小山・川村

(B地区G<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>北壁セクション図)

第4図-9

$$S = \frac{1}{20}$$

$$\left\{ \begin{array}{l} B+M = 29.74 \text{ m} \\ E+L = 31.0 \text{ cm} \\ \text{水平差} = 125.7 \text{ cm} \end{array} \right.$$



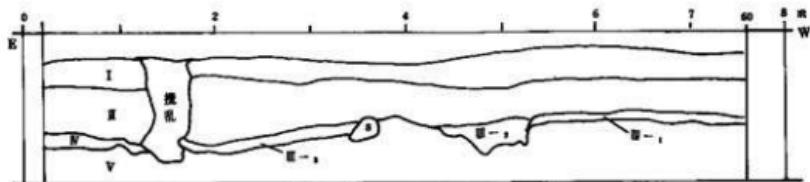
（注記）特になし、基本層序に同じ。

(C地区H<sub>3</sub>-13・14南壁セクション図)

第4図-10

$$S = \frac{1}{20}$$

$$\left\{ \begin{array}{l} B+M = 29.14 \text{ m} \\ E+L = 5.88 \text{ cm} \\ \text{水平差} = 47.5 \text{ cm} \end{array} \right.$$



（注記）I • 黒褐色土（草木根多く腐植土）

II • 黒色土（粒子細かくさらさらしており、1~2mmの砂粒を含む）

III-1 • 暗褐色土（粘土混入、砂粒混入、湿度なくさらさらする）

III-2 • 同上と同じなるも湿性多し。

IV • 黄暗褐色土（漸移層で粘性あり、しまりがあり湿性あり。）

V • ローム層である。

## [4] 堀 状 遺 構

第2次発掘調査におけるD<sub>1</sub>の発掘に引き続き、本調査ではD<sub>2</sub>～D<sub>5</sub>まで4本のトレーナーを掘り調査した。以下に本遺構の調査結果について述べる。

### (1) 位 置

本遺構の北東隅から西へ弧状に伸びる堀状遺構に第2図-1に示すようにD<sub>1</sub>～D<sub>5</sub>のトレーナーを設定した。

### (2) 形 態

第7図には、第2次及び本調査で発掘した堀状遺構(D<sub>1</sub>～D<sub>5</sub>)の断面図を、また、第4表にはこれら断面から得られた形態上の諸要素の測定値を示した。

第2次発掘で調査したD<sub>1</sub>についてはその形態のタイプは薬研掘的ではあるが明確ではなく、底部の両側に溝を通しているのが特徴であった。

今次発掘した堀状遺構(D<sub>2</sub>～D<sub>5</sub>)ではそれらの断面から箱堀タイプであることがわかった。これら4つのトレーナーのうち、互いに相隣り合うD<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>とD<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>はそれ類似の傾向をもつ。

例えば、D<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>では掘込みの幅(4.5m)、基盤からの深さ(1.5m)、傾斜角(5°)とも類似している。D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>では前者ほどの一致はないが、規模・形態からやはり同じ傾向をもつ。

4つのトレーナーについて、基盤掘込みの深さ(0.5～0.6m)、内側土塁(盛土)の傾斜角(40～50°)はほぼ共通しているが、それ以外の要素では測定値に多少ばらつきがある。

D<sub>1</sub>の西隣りにあるD<sub>2</sub>は底部中央が高く、両側は幅広の溝状となっており、D<sub>1</sub>底部溝の延長とも考えられる。

結局、5つのトレーナーを形態・規模から区分すると、D<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>、D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>の3つに分けられる。これらグループは原地形に由来するものである。

### (3) 地 質

D地区の地質は第2次調査で表したA地区の基本層序と基本的には同じである。D地区堀状遺構の基本層序は第4図-5に示した。これによれば、基盤をなす段丘構成層、基盤を掘り込んで上げた盛土層、遺構を埋めた堆積層の三層からなる。

段丘構成層は下から細砂・粘土・砂礫・ロームと重なり、これらの上に遺構掘削前の原黒土が被覆する。遺構はこの基盤を掘んでいる。

盛土層は土壌形成後、自然崩壊・流出により、遺構を埋積した層で最低所に薄く堆積している黒色腐植土層・粘土層があり、それらの上に土壌から流出したローム・粘土・黒土の混合層である黒褐色土層が厚く埋積する。

最上部は現在の黒色土で全体を薄く覆う。

なお、基盤の傾斜はD<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>の断面が示すように南から北へ約6°でゆるく傾斜している。

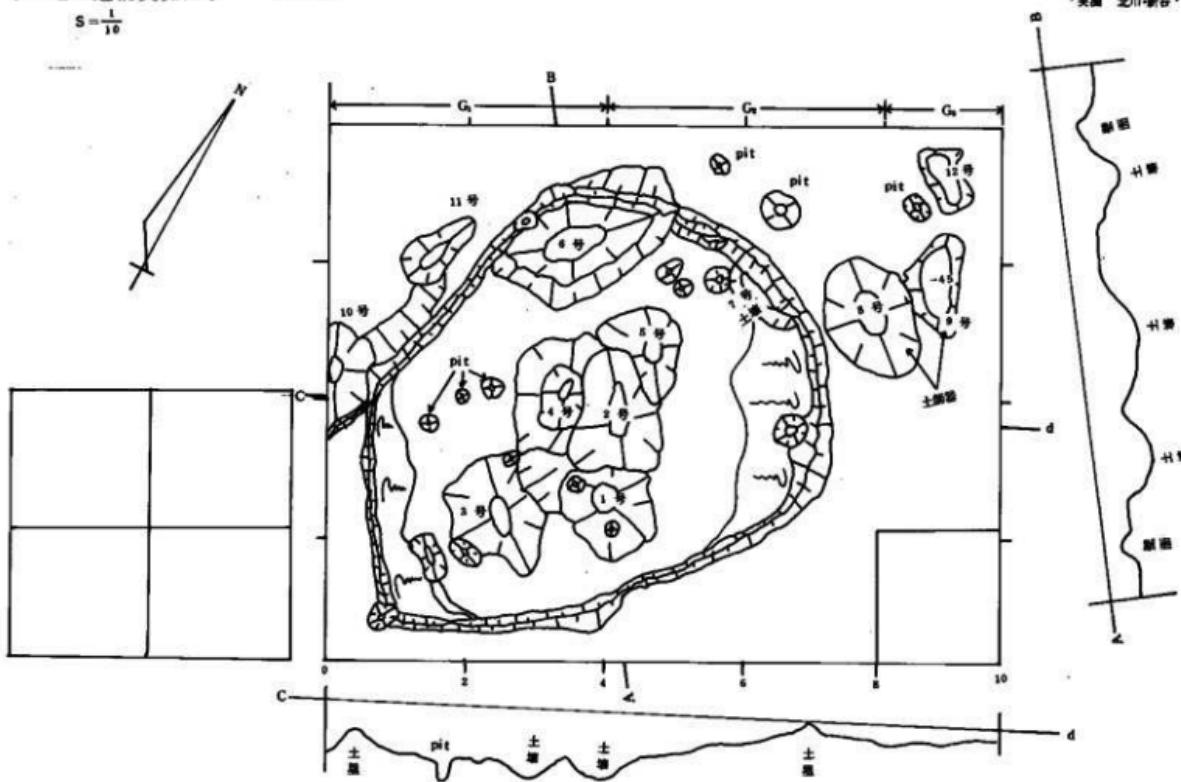
#### (4) 出土遺物・構築年代

この項については〔5〕出土遺物、〔6〕考察のところで述べるので省略する。

[B地区遺構実測図] 第5図

$S = \frac{1}{10}$

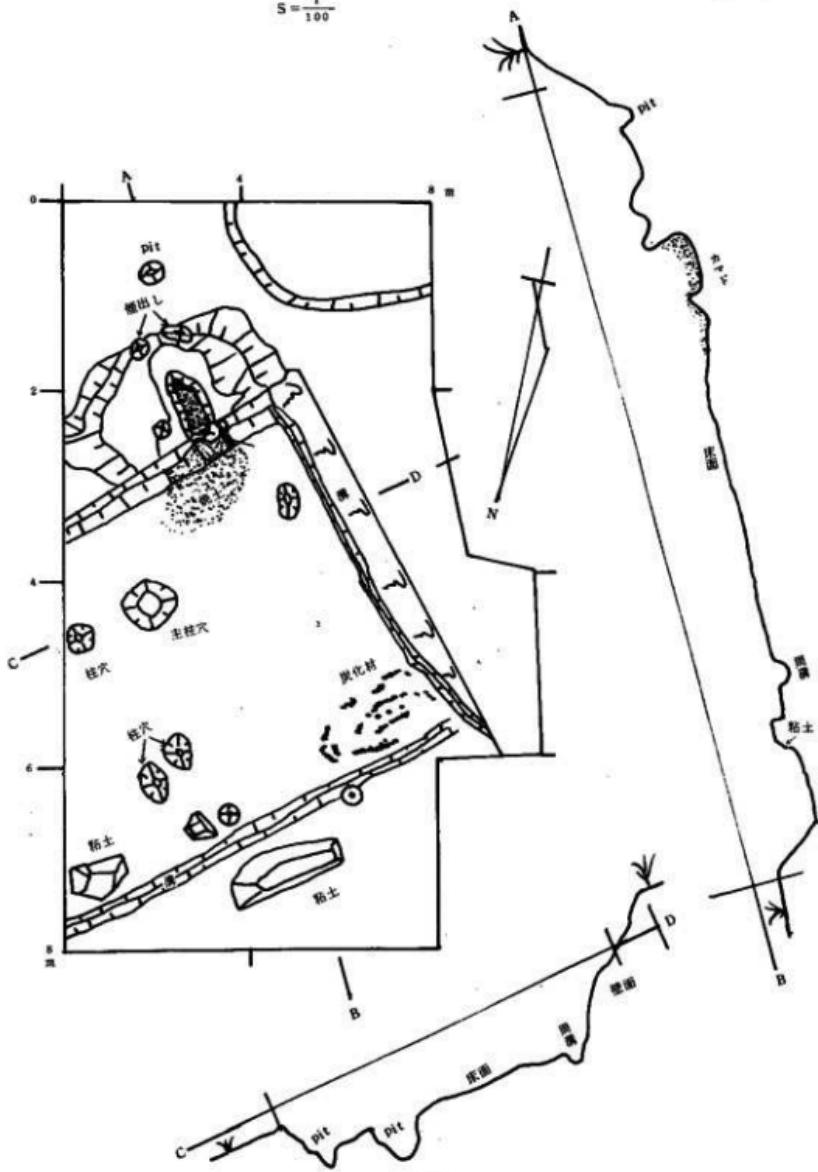
{ 1950. 06. 12 }  
実測 龍川新谷



(C地区堅穴住居址実測図) 第6図

〔1959. 06. 12〕  
実測 北川・野谷

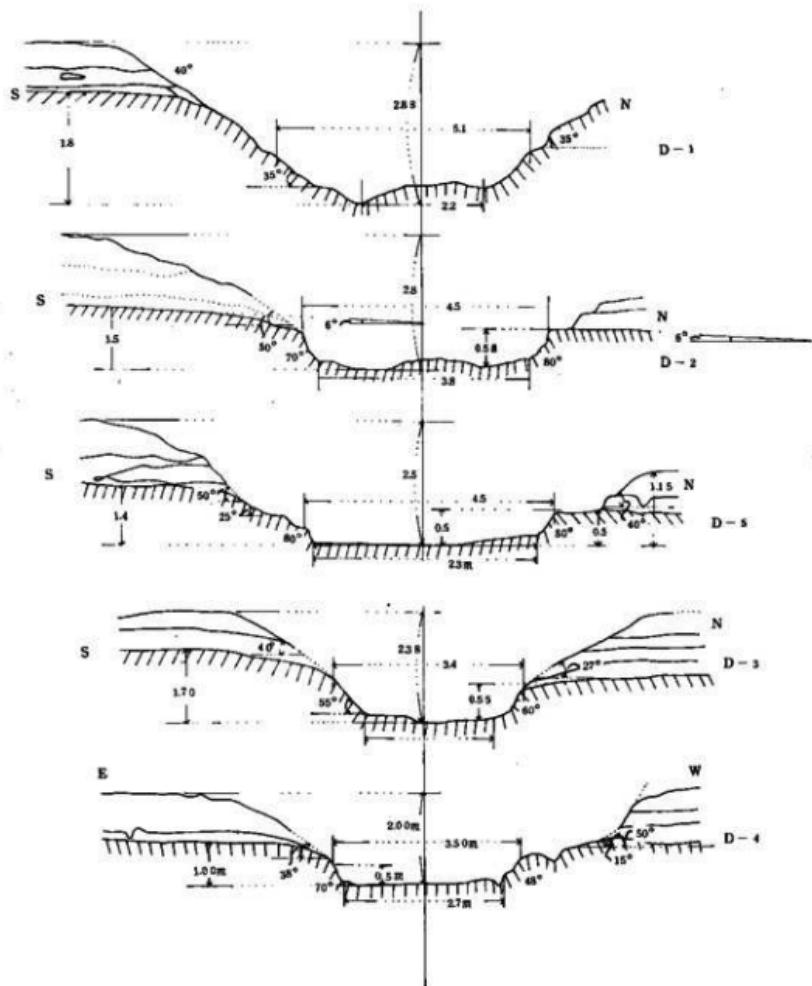
$S = \frac{1}{100}$



〔掘状遺構断面図〕

第7図

$$S = \frac{1}{60}$$



〔表4〕

各 堀 状 遺 構 の 測 定 値

D <sub>1</sub> ~ D <sub>5</sub> 測定項目	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>3</sub>	D <sub>4</sub>	D <sub>5</sub>
基盤掘込みの幅 (m)	5.1	4.5	4.5	3.4	3.5
底面の幅 (m)	2.2	3.8	4.0	2.3	2.7
基盤掘込みの深さ (m)	0.59	0.58	0.5	0.55	0.5
基盤上面から底面までの深さ (m)	1.8	1.5	1.4	1.7	1.0
盛土から底面までの深さ (m)	2.88	2.8	2.5	2.38	2.0
基盤掘込みの傾斜 (角度 °)	N (W) S (E)	35 35	80 70	50 80	60 55
基盤から盛土 への傾斜 (角度 °)	N (W) S (E)	35 40	52の2 段階段状 50	40 50	27 40
					50 38

## [5] 出 土 遺 構

(第5・6図、第4図1~5)

観音林遺跡の第三次発掘調査において検出した遺構は次のとおりである。

- 
- |                   |        |
|-------------------|--------|
| (1) B地区→土壤群・土壘    | (第V層上) |
| (2) C地区→堅穴住居址一基   | (第V層上) |
| (3) D地区→堀状遺構      | (第V層上) |
| (4) 土壘と焼土堆積層(第一次) | (第V層上) |
- 

(卓(4)は第一次試掘調査)

以上の4遺構であるが、(4)としたものは第一次試掘調査で出土したものであるので省略し、(1)~(3)の順につぎに述べることにしたい。

### (1) 土壘群・土壘(第5図)

このB地区第V層上面で検出した土壤群のうち、1号~6号としたものは、第二次調査で検出したもので、土壤の構築時期は、縄文時代後期「十腰内I式」土器が伴出したので、この期の土壤である。なおこれらの土壤からは獸骨片・鳥骨片が焼けて出土している。第三次調査では、これらの土壤のうち3号・4号土壤にサブトレンチを入れ調査した。

その結果、貼り付け粘土等もなく、第V層を直接掘り込んだ土壤であり、火によって焼けていることが判明した。

第三次調査で新しく検出した土壤は、8号・9号とした土壤である。この両者はその内部の覆土中に、「東北北部土師器型式」第二型式の土師器変形土器片と須恵器片を埋蔵していたものである(P・L 108-873-880)。したがってこの期の土壤であろう。

また、7号とした土壤は、これも第二次調査で検出したものであるが、今回その覆土中に骨片を検出した(写b-1、表Ⅱ-1)。この土壤は、「大洞C<sub>2</sub>式」粗製土器を伴う土壤であり、この期のもので出土骨片は(表Ⅱ-1)に示すとおりである。

さらに、第二次で検出した、B地区の北側で検出した「土壘」は、第三次調査に

において発掘区を拡張し ( $G_2 \cdot G_3 - 21 \cdot 22$ 、  $F - 21 \cdot 22 \rightarrow$  第3図-2 参照) さらに土壘の追求をしたのであるが、土壘は、C・Dを結ぶ線で消滅していた。この三角状の土壘は、土壤群を出む特異なものであるが、歴史時代のものであろう。(なおB地区の土壤・土壘の詳細は、第二次調査の報告書にゆづりたい。)

## (2) 壁穴式住居址 (第6図)

この遺構は第二次調査において、焼土の堆積する遺構および住居址壁面の一部を検出し、住居址の所在を予測したものである。

第三次調査では、その予測に基づいてグリットを組み(第3図-3)発掘をすすめた。

その結果を実測したものが第6図である。

住居址は、カマドを有し煙出し部を南東にもつもので、カマドをもつ面は東西約4mと推定される。またカマドより南北約4m北側に東西に溝状遺構が床面を掘っており、住居址は南北に拡張されたものと推察される。

その理由は、第6図の西壁下には溝が掘られており、その外側に住居址の壁面があるのであるが、北側には溝はあるが壁面がないのである。したがって拡張されたものと考えられる。

この住居址は、東西約4m、南北4m以上の方形プランを持つ住居址であろう。そしてカマドの位置は、東西約4mのうち西側約2mに片寄るものである。

この壁穴式住居址の年代は、カマドの右袖に密着して出土した菱形土師器(写19)によって推定できる。すなわち「東北北部土師器型式」第二型式の土師器である。このものの底面には砂粒が多く見られ、第二型式のうちでも新しいものと考えられる。

また、この住居址のカマド内の焼土からは、〔表II-64〕〔写6-64〕に示す海獣骨片が出土している。なおこの住居址の上層からは、「十腰内I式・大洞C<sub>2</sub>式」土器が出土しているが、両型式の土器は混在しており、住居址構築時に擾乱があったものであろう。

## (3) 堀状遺構 (第4図1~5)

この堀状遺構は第二次調査において、D<sub>1</sub>トレンチを設定調査したものである。

その結果、例を見ない形態の堀状遺構と認めたので、第三次調査において、D<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>・D<sub>4</sub>の4トレンチを(第2図-1)に示す位置に設定し調査をした。

その結果については、第4図1～5および第7図に示したとおりであるが、第三次調査の時点においては、その掘り方がいわゆる箱形掘りであるように認められるが、D<sub>2</sub>・D<sub>1</sub>のセクションにおいて若干の変形を認めるので、さらにこの両者とD<sub>3</sub>～D<sub>4</sub>との比較のため、さらにトレンチを設定し発掘検討を加えたいと考える。

この堀状遺構の形態は、今まで発掘した計5本のトレンチでは、さきにも述べたとおりベースであるローム層を掘り込んだ箱型であるが、その年代（構築または使用年代）は、決め手となる資料が乏しいので不明である。

現時点で推定できることは、後で述べるとおり堀状遺構内の盛土から土師器（第二型式）の出土があり、これの使用時期内またはそれ以後の構築・使用のものと考えられる。

#### (4) 土壙と焼土堆積層（第一次）（第2・3図-1）

この遺構は、昭和48年の第一次試掘調査で検出したものである。

このうち、土壙としたものは径約1m、深さ約40cmの浅い椀形のプランで、この内部に座った形で両手を組んだ土偶と、袖珍土器が出土した土壙である。

また、焼土堆積層は、第3図-1に示すF-2グリット東側斜面に堆積し、焼土内から「大洞C<sub>2</sub>式」壺形土器および、シカの骨が出土した遺構である。（詳細については報告書にゆずる。）

第一次～第三次調査をとおして、既述した(1)～(4)の遺構を検出したが、未だ遺構が本遺跡には所在するようである。

これらの遺構は、年代別に再掲するとつぎのようになる。

- 
- (1) B地区土壙群と土塁→・後期「十腰内I式」→(1号～6号土壙)と歴史時代  
・晩期「大洞C<sub>2</sub>式」(7号土壙)
  - ・歴史時代(平安期)→8・9号土壙と土塁
  - (2) C地区竪穴式住居址→歴史時代(平安末)
  - (3) D地区堀状遺構→歴史時代(平安期)土師器・須恵器使用期～それ以後
  - (4) A地区土壙と焼土堆積遺構→縄文時代「大洞C<sub>2</sub>式」期
- 

以上のように整理される。そして、つぎに述べる〔5〕出土遺物もまたこれらの遺構に関連することは明らかである。

〔表 1〕

绳文時代編年表（含観音林遺跡第一・二・三次） （新谷）						
推定年代	区分	土器型式	観音林遺跡第一次	観音林遺跡第二次	観音林遺跡第三次	主要遺跡
13,000 ↓ 6,000	草創期 早期	省略				越ヶ沢町 鳴戸遺跡
↓ 5,000	前期	円筒下層式土器 a・b・c・ d <sub>1</sub> ・d <sub>2</sub>			円筒下層式 1群 a 式 2群 d <sub>2</sub> 式	五所川原市 原子A遺跡
↓ 4,000	中期	円筒上層式土器 a・b・c・ d <sub>1</sub> ・d <sub>2</sub> ・e・		円筒上層式 b 式	円筒上層式 3群 d <sub>2</sub> 式	深浦町 一本松遺跡
↓ 3,000	後期	十腰内式 I・II・III・ IV・V→VI	十腰内式 I 式	十腰内式 I 式 II 式 V 式	十腰内式 4群 I 式 5群 II 式	五所川原市 原子B遺跡
↓ 2,000	晚期	大洞式 B B・C C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> A A'	大洞式 × × C <sub>1</sub> 式 C <sub>2</sub> 式 A 式 ×	大洞式 × B・C 式 C <sub>1</sub> 式 C <sub>2</sub> 式 A 式 ×	大洞式 × 6群 B・C 式 7群 C 式 8群 C 式 9群 A 式 ×	板柳町 土井1号遺跡 市浦村 五月女苑遺跡
BC 300 ↓ AD 300	弥生時代	前 中 後	期 期 期			五所川原市 山道溜池遺跡
↓ 1,200	土師器 須恵器 使用時代	○第一型式 ○第二型式 ○須恵器	土師器 第二型式 須恵器	土師器 第二型式 須恵器 珠州焼	土師器 10群 第二型式 11群 須恵器	五所川原市 前田野目遺跡

（×印=出土のない土器型式）

〔表Ⅱ〕

## 観音林遺跡出土骨片鑑定表

(金子 浩昌)

Gor site 資料	出 土 グリット	觀 音 林 遺 跡	(S59. 7月) (後・晩)
ム1 大洞C <sub>2</sub> 式	B <sub>13</sub> II 7 土 壌 号 内	微小骨片 12 多分獸骨のようである。	
ム2 大洞C <sub>2</sub> 式	H <sub>2</sub> I	微小骨片のみ 20 片あまり。 おそらく獸骨片。	
ム3 大洞C <sub>2</sub> 式	H <sub>2</sub> II	小骨片、さらにそれの割れた微小骨片からなるが、おそらくすべて獸骨であろう。	
ム4	C II カマド内 平安末	やや大きい骨片(海獸骨か?) 微小骨片 6 - 獣骨 いずれも焼骨	
ム5 大洞C <sub>1</sub> 式	D <sub>2</sub> 中 III	包含層は晩期。 破片 1 緻密部分の骨がうすいので鳥骨のようであるが、部位を決め難い。	
ム6 十腰内 I式	B <sub>1</sub> I G-22	獸骨片 1 (撓骨) 海綿体の様子から海獸骨か?	
ム7 平 安 { 鎌 倉	D <sub>2</sub> I 堀状遺構 平安～ 鎌倉	包含層は後・晩期 焼けた獸骨片 やや大きい破片であるが、イノシシもしくはシカの乳様突起の先端の破片と思われる。	
ム8 大洞C <sub>2</sub> 式	H <sub>2</sub> II	微小な骨片のみであるが、すべて獸骨片。	
備 考		すべて焼けた骨 獸骨は大体シカ・イノシシのような大型獸。 海獸骨(イルカ・アシカ)もあるらしい。 ム13、ム14などについては、さらに検討してみたいと思っている。	

〔表Ⅱ〕 観音林(第三次)遺跡出土石器・石製品等一覧表

No. 1

種別	類別	S·P·L No.	整理 No.	計測値 (長径×最大幅×器厚)	重量 (g)	石質	出土区・層位
有柄 石鎌	1	1	1	pitch 4.5×1.06×0.6	1	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> -II
			2	4.12×1.12×0.7	1	"	C-II
			3	pitch 4.0×1.08×0.98	1	"	AH <sub>2</sub> -III
			4	4.38×1.38×0.73	1	"	AH <sub>2</sub> -II
			5	Pitch 3.09×1.15×0.56	1	"	AH <sub>2</sub> -II下
			6	pitch 2.80×1.20×0.4	1	"	Ai-III
			7	4.42×1.2×1.02	1	"	AH <sub>2</sub> -III
			8	3.81×1.08×0.48	1	"	Ai-I
			9	Pitch 3.0×1.39×0.6	1	"	AH <sub>2</sub> -II
			10	pitch 3.38×1.5×0.72	1	"	AH <sub>2</sub> -III
			11	3.52×1.42×0.54	1	"	AH <sub>2</sub> -V
			12	3.38×1.28×0.6	1	"	AH <sub>2</sub> -III
			13	3.7×1.41×0.52	2	ホルンフェルス	AH <sub>4</sub> -II
			14	3.42×1.16×0.6	2	珪質頁岩	AH <sub>4</sub> -II
	2	2	15	0.54×1.42×0.56	2	"	C-III-1
			16	4.6×1.28×0.58	2	"	C-II
			17	Pitch 2.51×1.28×0.42	1	"	AH <sub>2</sub> -III
			18	2.80×0.98×0.38	1	"	Ai-III
			19	Pitch 2.84×1.0×0.44	1	"	Ai-II
			20	Pitch 2.73×1.18×0.32	1	"	Ai-II
			21	Pitch 3.08×1.26×0.4	1	"	AH <sub>2</sub> -III
	3	2	22	4.0×1.46×0.88	2	"	AH <sub>2</sub> -II
			23	3.2×0.62×0.62	2	"	AH <sub>2</sub> -V
			24	3.45×1.16×0.51	1	"	AH <sub>4</sub> -V
			25	Pitch 3.73×1.45×0.52	0.2	"	AH <sub>4</sub> -II
			26	3.48×1.50×1.0	0.2	"	C-III
	4	2	27	3.22×1.57×0.50	0.3	"	AH <sub>4</sub> -II
			28	Pitch 3.57×1.92×0.47	0.2	"	AH <sub>2</sub> -III
			29	Pitch 2.9×1.55×0.52	0.3	めのう	AH <sub>4</sub> -III
			X <sub>4</sub>	2.12×1.48×0.30	0.2	ホルンフェルス	AG <sub>1</sub> -V

無柄石鎌	X <sub>1</sub>	3	3.1	2.12 × 1.46 × 0.61	0.2	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> - II	
有柄 石鎌	7		3.2	pich 3.4 × 1.40 × 0.45	0.2	"	AH <sub>4</sub> - III	
			3.3	2.3 × 1.40 × 0.4	0.5	"	AH <sub>2</sub> - II	
			3.4	pich 2.5 × 1.58 × 0.4	0.2	玉ずい	AH <sub>4</sub> - V	
無柄 石鎌	X <sub>2</sub>	8	3.5	4.7 × 1.46 × 0.72	0.2	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> - III	
	3.6		3.6 × 1.68 × 0.62	0.3	ホルンフェルス	AH <sub>4</sub> - II		
有柄無柄 石鎌	3.7		5.16 × 1.40 × 0.85	1	珪質頁岩	D <sub>5</sub> - I		
	3.8		0.78 × 1.58 × 0.5	1	"	D <sub>2</sub> S - I		
フレーク活 用石鎌	9	9	3.9	4.25 × 1.6 × 0.55	1	にしき石(碧玉)	AH <sub>2</sub> - III	
			4.0	3.33 × 1.36 × 1.65	1	珪質頁岩	Ai - III	
			4.1	3.46 × 1.97 × 0.7	1	"	AH <sub>2</sub> - II	
			4.2	3.4 × 1.46 × 0.45	1	"	AH <sub>2</sub> - III	
石鎌 (残欠)	10	10	4.3	pich 1.95 × 1.0 × 0.66	1	玉ずい	Ai - III	
			4.4	1.7 × 1.1 × 0.4	1	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> - V	
石槍	1	4	4.5	6.14 × 3.12 × 1.2	24	"	AH <sub>4</sub> - II	
(point)			4.6	7.73 × 3.47 × 0.9	25	"	C - N	
			4.7	6.7 × 3.58 × 1.0	20	ホルンフェルス	D <sub>2</sub> S - II	
			4.8	5.78 × 3.2 × 1.0	15	珪質頁岩	C - III - 2	
石槍	2	5	4.9	4.78 × 2.88 × 1.88	200	"	AH <sub>4</sub> - II	
フレーク活 用小形 point			5.0	4.7 × 2.46 × 0.94	10	"	AH <sub>2</sub> - II	
			5.1	4.87 × 2.56 × 1.05	10	"	AH <sub>2</sub> - II	
			5.2	4.62 × 1.48 × 1.0	5	"	AG <sub>1</sub> - III	
石槍	3	6	5.3	4.12 × 1.68 × 0.44	2	"	AH <sub>2</sub> - III	
フレーク活 用小形 point			5.4	3.37 × 2.35 × 0.6	4	"	C - II	
			5.5	3.35 × 1.5 × 0.68	2	"	AH <sub>2</sub> - II	
			5.6	3.27 × 2.13 × 0.48	2	"	AH <sub>2</sub> - III	
石槍 未完成 point	4	7	5.7	立 2.08 × 3.22 × 0.68	4	"	Ai - III	
			5.8	pich 14.6 × 4.32 × 1.25	50	ホルンフェルス	AH <sub>2</sub> - V	
			5.9	5.84 × 4.85 × 1.85	34	めのう	C - III - 1	
			6.0	9.26 × 5.1 × 2.45	100	珪質頁岩	D <sub>3</sub> - I	
石槍 未完成 point	3	7	6.1	4.27 × 1.24 × 1.0	8	"	AH <sub>2</sub> - III	
			6.2	4.44 × 2.20 × 1.30	10	"	AH <sub>4</sub> - II	
			6.3	4.25 × 1.08 × 1.0	10	"	D <sub>2</sub> S - II	

未完成 石 槌	3	7	64	4.49×2.61×0.8	10	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> - III
			65	4.75×2.45×0.85	10	"	C - III
			66	pich 5.6×8.9×0.67	50	"	AG <sub>1</sub> - V
			67	pich 5.72×1.05×1.1	40	"	CD連 - IV
有柄 横形 削器  (フレーク 活用)	1	8	68	5.89×7.25×1.4	50	"	AH <sub>2</sub> - V
			69	5.52×7.06×1.38	43	"	AH <sub>2</sub> - V
			70	4.15×6.38×1.15	30	"	AH <sub>2</sub> - III
			71	pich 4.5×5.32×0.85	18	ホルンフェルス	A i - II
			72	4.62×5.08×1.10	20	珪質頁岩	C - N
	2	9	73	3.49×4.92×0.78	10	"	AH <sub>2</sub> - III
			74	pich 3.10×5.68×0.5	10	"	AH <sub>2</sub> - II上
			75	4.17×4.7×1.2	18	"	AH <sub>2</sub> - V
			76	2.36×4.27×0.78	10	"	AG - III
			77	pich 3.51×4.28×1.08	14	ホルンフェルス	D <sub>1</sub> S - I
有柄 縦形 削器  (side- scraper) (不定形)	3	10	78	3.71×4.18×0.92	10	珪質頁岩	AG <sub>1</sub> - III
			79	2.0×3.36×0.54	5	ホルンフェルス	AH <sub>2</sub> - III
			80	9.36×4.63×1.42	63	珪質頁岩	D <sub>1</sub> S - II
			81	7.1×5.1×1.32	40	"	C - II
	4	11	82	XX 5.5×2.4×0.8	10	"	AH <sub>2</sub> - V
			83	XX 3.37×3.1×0.51	8	"	A i - II
			84	7.42×2.66×1.4	28	"	A i - II
	1	12	85	5.88×4.3×0.9	20	"	AH <sub>2</sub> - III
			86	6.8×3.66×1.54	35	"	AH <sub>2</sub> - III
			87	5.87×3.05×1.0	20	ホルンフェルス	AH <sub>2</sub> - II
			88	XX XX XX 2.88×2.85×0.9	10	"	C - II
			89	5.62×3.08×1.32	20	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> - V
不定形 削器  (フレーク 活用)	2	13	90	4.10×2.4×0.55	10	"	AH <sub>2</sub> - V
			91	pich 6.78×4.34×1.02	52	"	AH <sub>2</sub> - III
			92	pich 7.65×4.4×1.25	48	ホルンフェルス	AH <sub>2</sub> - III
			93	pich 6.3×4.12×1.15	30	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> - III
			94	7.22×3.95×0.68	20	"	AG <sub>1</sub> - III
			95	5.62×3.15×0.90	20	"	A i - II
			96	pich 5.48×3.06×1.22	20	"	D <sub>1</sub> S - I

搔器 ende-scrapers (定型)	1	13	97	pich 6.35×2.8×1.50	30	珪質頁岩	C-II	
			98	4.87×2.68×1.17	20	"	AH <sub>2</sub> -III	
			99	6.0×2.74×1.35	25	"	C-III	
			100	6.0×3.27×1.68	36	"	D <sub>2</sub> S-II	
	(定型)		101	XX 3.9×4.72×1.2	28	"	C-III-1	
			102	XX 4.18×4.01×1.9	30	"	AH <sub>2</sub> -II	
			103	5.02×3.48×0.86	12	"	B-II	
			104	XX 3.5×2.15×0.96	8	"	AH <sub>2</sub> -III	
			105	XX 3.46×2.25×0.94	10	"	AH <sub>4</sub> -II	
			106	XX 4.61×2.3×1.46	20	"	AH <sub>2</sub> -V	
			107	XX 4.01×3.09×1.15	15	"	AG <sub>2</sub> -III	
			108	XX 3.91×3.55×1.48	20	"	AH <sub>2</sub> -II	
			109	XX 5.29×3.15×1.58	24	"	Ai-II	
			110	3.28×4.87×2.88	145	"	D <sub>2</sub> S-I	
石錐 (drill)	1 有柄	14	111	XX 4.01×2.95×1.18	10	"	AG <sub>1</sub> -III	
			112	4.8×1.4×0.65	4	"	AG <sub>1</sub> -V	
			113	3.97×1.26×0.85	4	"	Ai-III	
			114	4.93×0.84×1.0	2	"	C-III-2	
			115	3.95×0.93×0.85	2	"	Ai-II	
			116	3.08×1.35×1.02	3	蛋白石	AH <sub>2</sub> -II	
	2		117	3.30×1.25×0.74	2	珪質頁岩	C-II	
			118	3.65×0.68×0.64	1	玉ずい	AH <sub>2</sub> -III	
			119	2.30×0.68×0.3	1	"	Ai-II	
			120	XX 2.75×0.7×0.7	1	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> -III	
			121	2.42×0.64×0.4	1	"	AH <sub>2</sub> -III	
			122	XX 7.15×2.66×1.7	40	めのう	AH <sub>2</sub> -III	
石斧	1		123	XX 8.75×4.6×1.89	50	ホルンフェルス	D <sub>2</sub> N-I	
			124	XX 6.80×4.15×1.25	50	"	D <sub>2</sub> S-I	
			125	XX 6.32×3.63×2.51	50	安山岩	D <sub>2</sub> S-I	
			126	XX 6.42×3.4×2.05 摩切手法あり	68	ホルンフェルス	D <sub>2</sub> N-I	
	2		127	XX 3.32×2.22×0.87	10	"	C-II	
			128	XX 2.45×2.40×1.56 (表採)	15	"	表採	
			129	XX 5.7×5.42×1.92 pich XX	65	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> -II	

石 棒	17	130	立 2.20×3.0×2.42	258	ホルンフェルス	AH <sub>2</sub> - III	
		131	立 1.56×2.32×2.2	95	珪化木	AH <sub>2</sub> - II	
石 刀	(石ノ狀)	132	立 立 立 8.68×4.29×1.32	60	流紋岩	B - II	
		133	立 立 立 3.69×2.78×0.59	10	珪質頁岩	AG <sub>1</sub> - III	
大形器	1	134	6.72×7.05×1.90	112	"	B - IV	
	18	135	11.35×5.4×4.84	465	"	AH <sub>2</sub> - III	
鉈状石器		136	4.55×5.24×1.95	45	ホルンフェルス	AG <sub>1</sub> - III	
		137	1.3×1.1×0.7 0.3 mm 穿孔径	1	碧玉	AH <sub>2</sub> - II	
小玉 <small>に1 緑豆ヶ 色ヶは 原～ひ 石うす 他ちい 未充 他</small>	20	138	1.2×1.22×0.55	1	"	AH <sub>2</sub> - III	
		139	1.4×1.32×0.67	1	"	A i - II	
		140	1.40×1.38×0.78	1	緑色凝灰岩	AH <sub>2</sub> - III	
		141	0.9×0.98×0.48	1	碧玉	AH <sub>2</sub> - II	
		142	立 18.2×15.5×3.95	kg1.71	石英安山岩	AG <sub>2</sub> - V	
穿孔石	22	143	pich 7.5×4.15×2.62	100	珪質頁岩	AH <sub>2</sub> - II	
軸石	23	144	9.3~5.87 X 3.1~2.7 (長径) 厚さ	3/50 50 20	軸石	C - II D <sub>4</sub> - I D <sub>2</sub> - I	
		145	5.5×5.42×5.86	70	流紋岩	B - II	
球形石器		146	5.45×4.7×4.68	40	"	AH <sub>2</sub> - III	
石錐状石器	1	147	pich 4.52×4.6×1.88	50	安山岩	AH <sub>2</sub> - III	
		148	12.9×6.46×2.8	370	玢岩	C - III - 1	
石製底面	24	149	立 9.5×5.82×1.78	100	流紋岩	A i - II	
		150	pich 8.7×5.5×1.9	112	"	C - II	
椭円形扁平石器		151	pich 8.0×1.122×1.22	300	安山岩	C - III	
		152	9.29×8.38×6.12 失なり 眞	680	"	AH <sub>4</sub> - II	
クボミ石	25	153	pich 9.42×6.1×4.0	210	凝灰岩	AH <sub>2</sub> - III	
		154	11.8×10.37×4.28	300	"	AH <sub>4</sub> - III	
		155	12.98×5.95×3.88	320	緑色凝灰岩	AH <sub>4</sub> - II	
		156	13.5×6.69×3.15	332	流紋岩	AH <sub>2</sub> - III	
		157	16.0×11.0×7.38 朱痕	kg1.28	"	AG <sub>2</sub> - III	
		158	14.98×5.6×4.43	380	安山岩質凝灰岩	AG <sub>1</sub> - V	
タキ石	26	159	pich 17.7×7.25×3.9	555	"	AH <sub>2</sub> - II	
		160	12.14×5.58×3.79 朱痕	380	安山岩	AH <sub>2</sub> - II	
		161	pich 8.33×6.90×4.56	300	流紋岩	A i - II	

タ タ キ 石		26	162	1.25×7.25×3.06	340	花崗閃綠岩	D <sub>2</sub> S-II
			163	pich 7.32×6.80×4.42	298	安山岩	DC連-I
打 欠 き と 磨 痕 の 有 る 扁 平 石 器		27	164	pich 8.58×9.62×5.52	580	"	AG <sub>1</sub> -III
			165	4.64×4.6×1.38	40	"	C-II
			166	pich 6.15×4.42×1.22	60	流紋岩	AG <sub>1</sub> -III
			167	pich 7.72×5.35×1.25	90	"	AH <sub>2</sub> -II
			168	7.78×6.52×1.86	35	安山岩	AG <sub>1</sub> -III
			169	pich 9.7×5.12×1.38	115	"	D <sub>2</sub> N-I
			170	9.46×4.51×1.12	130	ホルンフェルス	AH <sub>2</sub> -III
			171	8.64×7.78×3.81	240	流紋岩	D <sub>4</sub> 中-II
周 あ 石 込 る 器 に 円 打 撲 欠 き 扁 の 平		28	172	7.19×6.68×2.43	120	凝灰岩	D <sub>4</sub> 北-II
			173	8.32×7.10×2.69	78	泥岩	D <sub>3</sub> 南-II
			174	pich 5.97×5.85×2.57	90	流紋岩	D <sub>2</sub> S-I
			175	6.58×6.01×2.66	100	砂岩	D <sub>2</sub> S-I
			176	8.35×7.35×2.71	200	流紋岩	D <sub>2</sub> S-II
			177	7.95×7.52×2.68	170	"	D <sub>3</sub> -I
			178	pich 5.52×4.79×1.75	55	"	AH <sub>4</sub> -II
			179	6.7×7.02×2.18	110	"	AH <sub>2</sub> -III
円 盤 状 扁 平 石 器 （円形）		29	180	5.19×5.22×1.92	70	"	AH <sub>4</sub> -III
			181	5.82×4.28×1.58	50	珪質頁岩	D <sub>2</sub> 中-I
			182	6.08×6.22×1.9	100	流紋岩	AG <sub>1</sub> -III
			183	5.38×5.50×2.50	80	"	D <sub>2</sub> 中-I
			184	6.56×6.65×1.64	82	"	CD-III
			185	pich 5.32×5.02×1.28	60	"	D <sub>3</sub> -II
		30	186	pich 4.65×4.50×1.08	12	珪藻質泥岩	C-IV
			187	5.18×7.52×2.28	100	安山岩質凝灰岩	D <sub>2</sub> 中-I
			188	pich 7.58×7.88×2.23	160	"	AH <sub>2</sub> -III
			189	pich 5.78×3.28×1.54	40	"	B-II
円盤状 扁平石器 (椭円形)		31	190	5.39×5.47×1.6	50	流紋岩	AH <sub>4</sub> -II
			191	pich 6.12×1.66×1.18	50	安山岩質凝灰岩	AH <sub>2</sub> -III
		2	192	5.55×5.05×1.43	50	流紋岩	AH <sub>2</sub> -III
			193	pich 8.08×6.88×1.48	110	"	AH <sub>2</sub> -II

円盤状 扁 平 石 器 (猪円形)	2	194	5.55×5.12×1.56	50	流 紋 岩	C - III
		195	7.42×4.85×1.65	70	"	C - II
		196	7.06×4.09×1.38	50	"	AH <sub>4</sub> - III
		197	7.72×6.91×2.41	50	"	AH <sub>4</sub> - III
		198	6.05×5.68×1.54	70	"	AH <sub>4</sub> - II
		199	pich 6.95×6.12×1.71	60	凝 灰 岩	C - III
		200	6.44×5.29×1.22	48	"	C - III
		201	⊗pich 4.80×7.80×2.02	50	流 纹 岩	D <sub>2</sub> S - II
		202	8.10×6.77×2.34	88	"	D <sub>2</sub> N - I
		203	6.82×5.42×2.11	100	"	AH <sub>2</sub> - III
円盤状 扁 平 石 器 (長方形)	3	204	8.46×8.28×2.12	190	"	AH <sub>4</sub> - II
		205	7.81×5.86×2.20	110	"	D <sub>2</sub> N - I
		206	4.30×4.02×0.84	20	"	B - N
		207	5.0×4.84×1.42	31	"	D <sub>2</sub> S - I
		208	pich 5.71×5.2×1.10	43	"	D <sub>2</sub> S - I
		209	5.31×4.66×1.40	50	"	D <sub>2</sub> 中 - I
		210	6.30×5.67×1.86	80	"	C - III
		211	6.25×4.66×1.12	55	"	AH <sub>2</sub> - II
		212	⊗pich 5.32×5.62×1.78	70	"	C - III
		213	5.22×4.42×2.03	70	"	D <sub>2</sub> N - I
黒曜石	22	214	6.0×4.0×1.30	40	"	AG <sub>2</sub> - III
		215	pich 4.55×4.54×1.02	30	"	C - III
碧玉 原石	35	216	5.2×4.5×3.3 2.35×1.82×0.9	50 10		AH <sub>2</sub> - II AG <sub>1</sub> - III
		217	8.75×6.05×4.55 1.35×1.28×0.78	150 2		AH <sub>2</sub> - II AG <sub>2</sub> - III
铁石英	2ヶ	218	5.58×4.32×1.72 4.84×3.55×1.32	50 20		C - III AH <sub>2</sub> - II

## 〔参考〕

出土した土器群について述べる前に、縄文時代晚期の土器群について、精製土器、粗製土器の用語を用いて、P・L 1~108に述べてあるが、この用語の概念を最初に明らかにしておく必要がある。

筆者は、晚期の土器群を精製・半精製・粗製に分類することが妥当と考えているのであるが、本報告書では精製土器（半精製を含む）および粗製土器に分けて述べることにする。

なお、精製土器と粗製土器の出土比率は、当遺跡ではほぼ 2.5% : 97.5% となるようであって精製土器の出土は少量である。

### 専用語について

#### (1) 精製土器

- 晩期の各型式における主文様のあるもの。
- 朱ぬりのされているもの。
- 無文であっても研磨された器面のもの。
- 上記のうち、いずれかを合わせもつもの。

#### (2) 粗製土器

- 口縁直下より縄文のみ施文されるもの。
- 口頭部のみに、その属する型式の施文があり、肩部より胴部下まで縄文・撻糸文・条痕文等が施文されているもの。
- 無文で研磨されていないもの。
- 煮沸痕があり主文様のないもの。
- 上記のいくつかを兼ね備えているもの。

本報告書 P・L 1~108においては、(1)・(2)の概念で、精製・粗製の土器を分類して述べている。

## [6] 出 土 遺 物

(表 I・II・III、写 1~13、写 b-1、  
P・L1~108、S・P・L1~35)

観音林遺跡の第三次発掘調査において出土した遺物は、大別して(1)土器・土製品、(2)骨片類、(3)石器・石製品に分けられる。

このうち、最も多いのは土器類であって、土器類は総量で約50箱(60cm×28cm×15cm)の多量であった。これらの出土土器類は、縄文時代前期・中期・後期・晚期および土師器・須恵器すなわち歴史時代にわたるものである。

また、(2)とした骨片類は径9cmのシャレーで約5コ分の少量であるが、獸骨(陸・海性)、鳥骨等が出土した。

(3)とした石器・石製品は、總数213点にのぼる数である。

これら(1)・(2)・(3)とした出土遺物のうち、(1)の土器・土製品は、最も出土量の多い地区はA地区で、次にC地区、D地区の順となっており、最も少ないのでB地区であった。

他の(2)とした骨片類は、A地区、C地区、B地区の順である。量的にはいずれも少ないのであるが、その価値は高いものと考えられる。

(3)とした石器・石製品では、A地区が最も出土数が多く、C地区、D地区、B地区は少ない出土である。

土器類のうち、須恵器・土師器類はB地区、D地区、C地区の出土で、A地区からは出土がない。A地区からは、後期・晚期の土器、特に晚期の土器が多量に出土した。

この地区による出土遺物の量的または、質的な相違は、〔4〕出土遺構で述べた遺構と相關することは明らかである。

以下、(1)、(2)、(3)に分けて出土した遺物について述べることにする。

### (1) 土器・土製品 (表 I、P・L1~108、写 1~19)

#### 1) 土製品 (写 1・2、写 8)

•写1に示したものは、D地区D<sub>2</sub>トレンチV層出土の「大洞C<sub>1</sub>式」土偶である。

計測値等この土偶については写1に述べてあるので省略する。

•写2に示したものは、A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土の「大洞C<sub>1</sub>式」土偶である。こ

の土偶についても写2に述べたとおりである。

・また、写8-1a・1bに示したものは、縄文時代後期「十腰内I式」期の土偶破片である。

このものは、一部に見える施文から「十腰内I式」と判断した。C地区住居址上のI層より出土した。

・写8-4a・4bに示したものも、後期「十腰内I式」土偶の肩部より腕部の破片である。このものは、A地区H<sub>2</sub>-II層出土である。

・写8-2a・2bとしたものも、土偶腕部と考えられる。このものは、D地区D<sub>2</sub>トレンチV層出土のものであるが、型式名を決定する施文が無く無文のものである。

このものが出土したD<sub>2</sub>トレンチからは、写1の土偶も同一層（V層）から出土しており、この層からは「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式」土器も出土している。以上のことから「大洞C<sub>2</sub>式」の可能性がある。

以上、土製品としたものは、「土偶」で欠損品であるが一応5点出土した。

## 2) 土 器 (写3~19、P.L1~108、表I)

・観音林遺跡の第三次発掘調査において出土した土器群を土器型式に分類すると、〔表I〕に示したように分類される。

卒第1群土器	円筒下層a式土器
卒第2群土器	円筒下層d <sub>2</sub> 式土器
卒第3群土器	円筒上層d <sub>2</sub> 式土器
卒第4群土器	十腰内I式土器
卒第5群土器	十腰内II式土器
卒第6群土器	大洞B・C式土器
卒第7群土器	大洞C <sub>1</sub> 式土器
卒第8群土器	大洞C <sub>2</sub> 式土器 (製塩土器)
卒第9群土器	大洞A式土器
卒第10群土器	土師器 (第二型式)
卒第11群土器	須恵器

以上、出土した土器群を群別に分類すると11群に分けられるが、この11群に分類した土器を、その器形・施文等によって土器型式ごとに分類すると、縄文時代前期

の円筒下層a式より土師器、須恵器の使用時代、すなわち平安末～鎌倉期に至る長い期間にわたる土器群が出土したのである。

これらの各型式ごとの土器および各地区ごとに出土した土器については、〔写3～19、P・L1～108〕に述べてあるので省略するが、第一～第三次発掘調査における出土土器の型式について比較し、本遺跡の全体像について土器型式の上から述べることにする。

●第一次調査では、土器型式で「十腰内I式」「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式」の土器が出土し、第二次調査では「円筒上層b式」「十腰内I・II・V式」土器が出土した。

また、今回の第三次調査では、〔表1〕に示したとおり第1群とした縄文時代前期「円筒下層a式」「同d<sub>2</sub>式」、中期では「円筒上層d<sub>2</sub>式」、後期では「十腰内I・II式」、晩期「大洞B・C・C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式」の土器が出土した。

それに加えて、第一～三次調査を通じて、共通して土師器第二型式・須恵器が出土している。

この第一～第三次調査において出土した土器群を検討すると、A地区は縄文晩期の土器が多く、その下層に後期「十腰内I式」土器が少量あり、須恵器・土師器の出土がない。

これに対して、B地区は、後期「十腰内I式」と晩期「大洞C<sub>2</sub>式」土器、それに土師器第二型式が伴っている。

また、C地区は、晩期の土器と若干の土師器、「十腰内I式」土器を伴う地区である。

さらに、D地区においては、「大洞C<sub>2</sub>式」土器を包含する原黒土層（第V層）は例外として、若干の須恵器・土師器を伴う地区である。

以上のことから、A・B・C・D地区は、詳細に分析すると、それぞれ時差をもち、また遺跡の成因・性格が異なるように認められるところである。このことについては〔考察〕の項で再び述べることにして、つぎに「製塩土器」および「十腰内II式」土器について特にふれたい。

#### 「製塩土器」（写x）

今回の第三次発掘調査において、わずか2片の破片ではあるが、A地区H<sub>2</sub>グリットII層より製塩土器が出土した。

この土器については、（写x）に述べたとおりであるが、B・M<sub>1</sub>→31.605mの地点において出土した事実である。これと同類は、当方の市浦村五月女窪遺跡

および東津軽郡「今津遺跡」においても出土しているのであるが、このことについても〔考察〕の項でさらに述べたいと思う。

### 〔十腰内〕式土器 (P・L 55)

この「十腰内」式土器は、P・L55に示したものであるが、土器についてはP・L55に述べたとおりであるので省略するが、この形態と整形のものは、今回の調査で始めての出土である。

当遺跡のみではなく、西北五地方では現在まで報告例はないものである。

以上、特例2例を述べたが、個々の土器等については、P・L1~108に記してあるのでここでは省略する。

### (2) 骨類 (表Ⅱ、写b-1)

今回の第三次発掘調査において、小骨片がB地区→7号土壙内、A地区→H<sub>1</sub>グリットⅠ層、同グリットⅡ層、C地区→堅穴住居址内のカマド内、D地区→D<sub>2</sub>トレンチ中央Ⅰ層上、B地区→G<sub>1</sub>-22Ⅰ層、D地区→D<sub>2</sub>トレンチⅠ層、A地区→H<sub>1</sub>グリットⅡ層等合計8ヶ所より出土した。

このうち、〔表Ⅱ〕に示したとおり、1は7号土壙内出土で、縄文時代晩期「大洞C<sub>2</sub>式」、4は土師器使用の堅穴住居址カマド内、5は堀状遺構のD<sub>2</sub>トレンチ中央のⅢ層より出土した。この層は「大洞C<sub>2</sub>式」土器包含層である。6は十腰内Ⅰ式期、7は包含層は後・晩期、遺構は堀状遺構で平安末～鎌倉期とも思われる。8は大洞C<sub>2</sub>式期である。

この計8ヶ所より出土した小骨片を、順不同であるが鑑定表に整理すると、〔表Ⅱ〕のようになる。

この〔表Ⅱ〕に整理した骨片について、日本大学金子浩昌氏に鑑定をお願いし、その結果をいただいた。〔表Ⅱ〕はその一覧表である。

出土した骨片は、獸骨・海獣骨および鳥骨のようであり、イノシシもしくはシカ、中にイルカまたはアシカなどもあるようである。

しかも、これらの骨片はすべて焼けているものである。

出土した地点が8ヶ所にわたっており、当遺跡のうちD地区を除くと、いずれも焼土を伴う地点、またはそれに近接する場所である。

第一次～第三次発掘調査において、焼土層、カマド内、土壙内等すべて火に関係する地点の出土である。

時差は遺物・層位を検討してもわかるのであるが、これら骨片の出土と遺跡の各期における性格等について、さらに考えてみたいと思う。

金子浩昌氏には、第二次・第三次にわたって御鑑定をいただいた。ここに記して感謝申し上げる次第である。

### (3) 石器・石製品 (S.P.L 1~35、表Ⅲ 1~7)

観音林遺跡の第三次発掘調査において出土した石器・石製品は総数で 213 点の出土である。

第一次発掘調査の石器出土数は 67 点、第二次発掘調査において出土した石器数は 150 点であった。

第一次～第三次発掘調査で出土した石器数は合計 432 点である。発掘面積の大小はあるが今回の出土石器数は最も多い出土数である。

・第三次発掘調査、すなわち今回の調査において出土した石器の組成を明らかにするために、石器を器種別に分類すると次の 19 器種に分類される。

1) 石 鐵	20.65%	44 点	11) 挖 器	7.0 %	15 点
2) 石 槍	9.85%	21 点	12) 石 錐	5.16%	11 点
3) 削 器	14.55%	31 点	13) 石 斧	3.7 %	8 点
4) 石 棒		2 点	14) 石 盆		1 点
5) 石 刀		2 点	15) 穿孔石		1 点
6) 鈍状石器		2 点	16) 球形石器		2 点
7) 小 玉		5 点	17) 石錐状石器		2 点
8) 楕円形扁平石器		2 点	18) 打欠きと磨痕の ある扁平石器		
9) クボミ石	3.7 %	8 点			6 点
10) タタキ石		5 点	19) 円盤状石器	21.1%	45 点

以上の 19 器種に分けることができる。他に種玉・鉄石英・黒曜石・軽石・ひすい等の自然石等も出土している。

これらの石器類は、主として晩期のものであり、その石器組成はきわめて多様にわたっていることが知られるところである。また、円盤状石器（円盤状扁平石器）が 21.1%、石鐵 20.65%、削器 14.55% の順になっており、特に円盤状石器の出

土数が多いのが注目される。

•つぎに出土した石器類の岩質を分類してみるとつぎのように分類される。

1) 珪質頁岩	50.7 %	108点	11) 石英安山岩	1
2) ホルンフェルス	8 %	18	12) 粉 岩	1
3) めのう		3	13) 濃灰岩	5
4) 玉ずい		4	14) 緑色凝灰岩	2
5) 鎧 玉		5	15) 安山岩質凝灰岩	3
6) 蛋白石		1	16) 花崗閃綠岩	1
7) 安山岩	4.6 %	10	17) 泥 岩	1
8) 珪化木		1	18) 砂 岩	1
9) 流紋岩	20.65%	44	19) 珪藻質泥岩	1
10) 緑色凝灰岩		2		

以上19岩質となっている。このうち最も多のが珪質頁岩50.7%、流紋岩20.65%、ホルンフェルス8%となっている。最近このホルンフェルスが石器に占める比重がかなり大きい点に注目する必要がある。

石器の出土区、または出土層位については〔表Ⅲ版1～7〕に述べてあるので省略する。また、石器・石製品については(S・P・L1～35)に示してあるので省略する。

## [7] 考 察

(1) 本遺跡は、〔3〕地形・層序の項で述べたとおり、前田野目台地のⅡ面すなわち標高30～40mの面上にある。当五所川原市の東部、梵珠山脈の西麓に展開する前田野目台地のⅡ面（松野木地区）には、縄文時代の前期・中期・後期・晩期および歴史時代にわたる各期の遺跡が分布しており、それぞれの時代において人間生活を営むのに好条件を備えた地域であったものと考えられるところである。

当遺跡をのせる舌状台地もそのことを物語るように、歴史時代の伝承をも残しており、現地形を表面上から観察する限りにおいても地形が階段状を呈する部分もあり、また、空堀状遺構もあって館址の様相を示している。

この舌状台地に、第二次発掘調査と同様、A地区・B地区・C地区・D地区の4地区を設定し、第三次発掘調査を実施したのである。その結果については既に述べたとおりであるが、若干の問題点が残った。以下残された問題点と思われる事項を中心に考察を加えてみたいと思う。

### (2) 地形・層序等について

さきに(1)で述べたとおり、この遺跡の所在すなわち舌状台地は、縄文時代前期より歴史時代に及ぶ長い年月、人々の生活舞台となっていた。

このことは、出土遺物から明らかなことではあるが、A～D地区の層序を見るとそれを裏付ける事実が層序にあらわれているように考えられる。

・すなわち、B地区における層序（第4図-9）においてはA層を欠き、またB層のⅢ層も欠けていることに注目したい。このことはB地区に、既述したとおり歴史時代の土壙があり、その他縄文時代後期・晩期および土師器・須恵器使用期の土壤群の所在等から削平と整理・攪乱等の影響があったものと考えることが妥当であろう。

・A地区、この地区は館址と伝承される階段状地形の平面部・斜面部にあたる地点であるが、歴史時代の攪乱の影響は少なく、台地上部の削平・整地による黒土の二次堆積がやや厚い程度で、第Ⅰ層以下は生きているようである。この地区的層位は、第4図-7・8図に示したとおりであるが、第Ⅰ～第V層にわたって縄文時代晩期～後期の遺物が多量に出土したが、歴史時代の遺物は皆無である。

・C地区では、第4図-10に示したセクションのとおり、この地区においても第1層は特に厚い。しかも北方にすすむ程厚さを増している。

このことも、A地区で述べたとおり、台地中央部の削平・整地の際、第1層を北方に運びあげたか、自然の傾斜によって第1層が深いものであったのか、この点については今後に残された問題である。

・D地区、この地区は既述したとおり堀状遺構を解明する意図で設定した地区である。

第4図-5に「堀状遺構基本層序図」を掲げたが、堀内より掘り上げた盛土は、意図的に南側に高く盛土している。

今回設定したD<sub>1</sub>～D<sub>2</sub>のトレンチ調査結果からは、第7図(断面図)でわかるように堀の形態は箱堀であることが明らかになった。

第2次調査でのD<sub>1</sub>トレンチにおいてはそのセクション(参考図)から若干の形態の違いが認められる。それが何に起因するのかさらに追求を要する課題である。

### (3) 出土遺構について

出土した遺構は、B地区において縄文時代後期の土壙および晩期の土壙、土師器包含の土壙、三角状に残る小土壙を検出したことは既に述べた。

また、C地区においては、既述したとおりカマドを備えた竪穴式住居址を検出した。D地区の堀についても既に述べたとおりであり、またA地区では昭和48年の第一次試掘調査において土壙状ピットと焼土堆積層を検出した。このことについても既に述べたところである。

・ここでは、B地区における土壙の性格、三角状土壙、C地区の住居址について考えてみたい。

B地区において検出した土壙は、1～12号土壙である(第5図)。このうち、7号土壙は晩期大洞C<sub>1</sub>式土器を伴出し、他の土壙群は後期十腰内I式土器を伴うものである。また、8号・9号土壙は、土師器を伴う平安時代後葉のものであった。

このうち7号土壙内、またはその覆土内からは、既述した骨片類の出土があり、土壙そのものの内側が焼けているものであった。

この土壙は、直接第V層を掘り込んだもので貼り付け粘土等特に手を加えたものではなく、穴を掘って獣や鳥等を焼いたものようであった。

しかし疑問が残るのは、後期・晩期において、このような方法が実施されていた

のであろうか。当遺跡では、A地区F<sub>2</sub>グリットにおいても焼土の中からシカの焼骨が出土しており（第一次調査）、ある程度の確信をもって獸や鳥類を焼いて調理したものと考えて良いように思うところである。

- 土壙について次に述べると、第5図に示すように北側を頂点に三角状の土壙がめぐる遺構である。

このものは、7号土壙（大洞C<sub>2</sub>式）の上部を通っているもので、それより新しいことを証明している。

また、8・9号土壙は、土師器片をその内部より出土したもので、この土壙は、この土師器使用期のものかも知れない。しかしそのきめ手は特にないのである。したがって、この土壙については今後類例を待つてさらに考えたい。

- C地区においては、堅穴住居址を検出したことは既に述べた。元来住居址からは遺物が多く出土しないのが一般的であろうが、この住居址も同様で、カマド右袖より菱形土師器一個体が横位で出土したのみである。このことは既述したが、この菱形土器によって年代を知ることができる（写19参照）。この土器は「東北北部土師器型式」第二型式に属する菱形土師器で、土師器としては器形から考えて新しいものである。筆者は平安時代末と考えている。

なお、C地区には遺構が未だ所在するようである。第二次調査で住居址の壁面を検出しているので再調査が必要である。（なお、壇状遺構については既に述べたので省略する。）

#### （4）出土土器について

出土した土器群については、多くのスペースで後掲してあるので、ここでは若干の問題点のみに限定して述べたい。

- 出土した土器群のうち、C地区CDトレンチにおいて「円筒下層a式」土器が土壙状ピットより出土した。ピットそのものは未調査のため不明であるが、縄文時代前期a式期の遺構の所在により観音林遺跡の上限が約6,000年程さかのぼるようになった点に留意したい。
- つぎに「十腰内Ⅱ式」土器が出土したことである（P-L54・55）。当西北五地方においては、現在までのところ「十腰内Ⅱ式」土器の出土報告は殆んどなく、今回が最初である。

この土器のうち（P-L55）に示したものと同種の土器が、青森県三戸郡五戸町次郎左衛門長根遺跡より出土している。本遺跡のA地区H<sub>4</sub>グリットより（P-L55）の

土器が出土したことを報告しておきたい。

・つぎに晩期の土器群について考えてみることにする。

本遺跡において、縄文時代晩期に属する土器群は〔表Ⅰ〕縄文時代編年表に示すとおり「大洞B・C式」～「大洞A式」に至る各型式の土器が出土した。

このうち、「大洞C<sub>1</sub>式」蓋形土器としたものは(写4-2a+b)、出土例の少ないものである。

また、特筆すべきは、製塩土器の出土である(写x参照)。この製塩土器は、市浦村「五月女窯遺跡」においても出土があり、そのうちの第一型式とした製塩土器である。

この製塩土器の出土は、わずか2片の出土であるが、後述する骨類の中に海獣骨等も含まれるようであり、製塩をしたかどうかは別にして、どのような意味をもつものか今後の研究課題である。

・他の晩期の土器群は、大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式とも当地方においてはノーマルな施文・器形のもので、いわゆる亀ヶ岡式土器の典型的なものである。

筆者が、市浦村「五月女窯遺跡」出土資料を基にして仮称した「大洞C<sub>1</sub>-A式」とした「入り組み工字文」の未完成な施文のあるものは、わずか2～3片の出土で、本遺跡の「大洞C<sub>2</sub>式」土器は、C<sub>2</sub>式期の前半のものと考えられる。

それに対して、つぎの「大洞A式」とした土器群は、その施文が典型的な「入り組み工字文」で、他に「矢羽根状文(綾杉文)」の施文のものも出土した。

後者の「矢羽根状文」の施文される器形は皿形土器に多く、少数の鉢形土器にも施文されるが、この「矢羽根状文」の施文されるものは、出土する遺跡と出土のない遺跡もあって、地域差か、遺跡差かは研究を要する事項であろう。

#### (5) 骨類

今回の第三次発掘調査において、さきに述べたとおり、A1～A8の骨類を検出した(表Ⅱ参照)。また第二次調査においても骨類の出土があったのである。

これらの出土骨類は、金子浩昌氏に御鑑定をお願い申し上げた。その結果は(表Ⅱ)に示したとおりであるが、これらの骨類は、いずれも焼けたものであって遺跡を営んだ縄文人等は、焼いた肉を食べたのであろうか。食生活を知る上で興味深い問題である。

#### (6) 石器・石製品

出土した石器・石製品は、総数213点であるが、ここでは、若干の問題点を考え

てみたいと思う。

・一つは、石器の形態に関する問題である。すなわち、第一次（昭48）調査で出土した石器数は30点、第二次（昭49）では14点、今回の調査では44点の出土で計88点の石器が出土している。

しかしながら、基部が内側に湾入するものは第1次～第3次を通じて1点も出土していないのである。出土した土器群は既述のように「十勝内I・II式」「大洞C<sub>1</sub>～A式」土器が主体であるが、石器もこの期（主体は晩期）のものである。

基部の内湾する形態のものは、縄文時代中期・後期・晩期を通じて岩木川東岸地帶には少なく、西海岸地帶に多いことは筆者がしばしば述べてきたところである。

・いま一つ考えたい事項は、今回の発掘において「円盤状扁平石器」の出土がきわめて多く45点（21.1%）を占めていることであるが、その用途・機能は不明である。今後留意していきたい事項の一つと考える。

・いま一つは、石器の岩質に関する問題である。特に注目すべきは、ホルンフェルスを原材とした石器である。

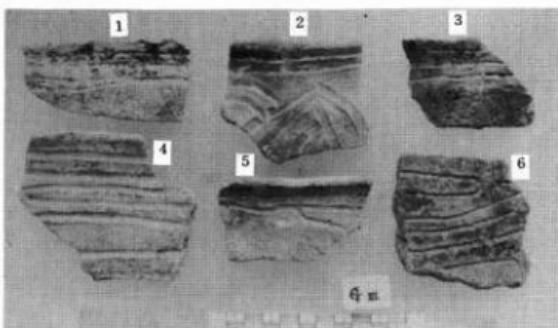
このものは、第二次調査で6%、第三次調査で8%の石器の原材となっているものである。詳細に検討すれば、他地域の遺跡においても約10%程度の比率でホルンフェルスが原材として使用されているものと予測されるところである。

以上簡単ではあるが、問題点に限定して若干の考察を加えてみた。諸先学の御叱正を賜わりたい。

【縦音林遺跡出土、土器資料——第三次発掘】

(A地区G<sub>1</sub>・<sub>2</sub> グリットV層出土、土器)

P・L 1



— 18 —

[1～6]→ここに掲げた土器は、A地区グリットG<sub>1</sub>・G<sub>2</sub>のV層より出土した土器群である。

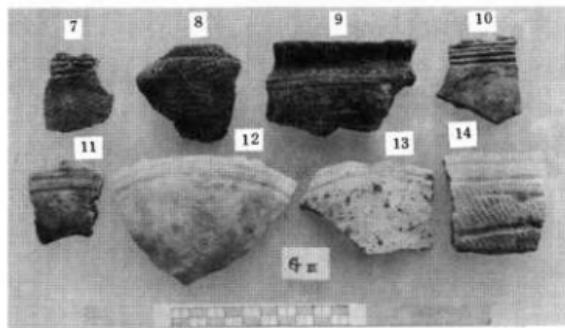
- この1～6としたものは、いずれも縄文時代後期初頭「十腰内I式」土器である。器形は、破片のため正確は期したいが多分壺形か深鉢形と思われる。

- ◎この「十腰内I式」土器群は、沈線文により自由奔放な施文があるのが特徴である。

{△ G<sub>1</sub>・<sub>2</sub> = G<sub>1</sub> + G<sub>2</sub>の略である。以下も同様。}

(A地区G<sub>1</sub>・<sub>2</sub> グリットII層出土、土器)

P・L 2



[9～14]→ここに掲げた土器群は、いずれも縄文時代晩期の土器群で、第II層出土のものである。

- このうち、(7～10)は、「大洞C<sub>1</sub>式」土器で粗製の鉢形か深鉢形土器である。

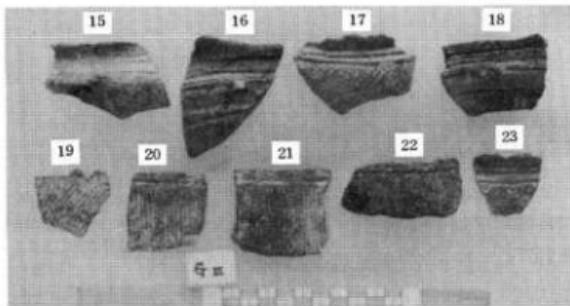
- また、(11～13)は、皿形土器で、「大洞C<sub>2</sub>式」と思われる。

- (14)は、これも皿形土器で、その施文から見て「大洞C<sub>1</sub>式」の精製土器である。

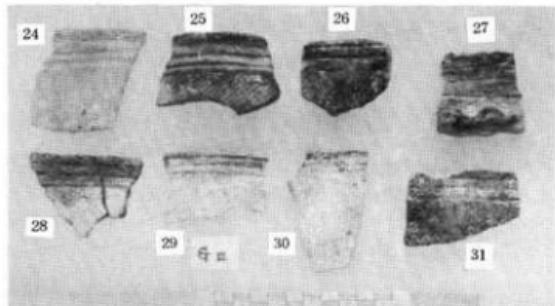
◎縄文時代の晩期には、粗製と精製の土器群があって、両者の概念については、本文を参照されたい。

〔A地区G<sub>1</sub>～2 グリットV層出土、土器〕

P・L 3

〔A地区G<sub>1</sub>～2 グリットV層出土、土器〕

P・L 4



( 15～23 ) →ここに掲げたものは、いずれも縄文時代晚期の「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。

- ・いずれも粗製土器で、器形は、( 15～17 )は、やや肩部の張った鉢形土器。( 19～23 )は、肩部の張らない鉢形土器であろう。なお、( 18 )は精製土器である。
- ・また、( 15～18 )は波状口縁で( 19 )は山形突起を持つものらしい。( 20～22 )は口縁部沈線が2条、( 19 )縄文のみである。
- ◎「大洞C<sub>2</sub>式」の鉢形・深鉢形土器の頸部には、3条を基本とする沈線文が施文されるのが基本パターンである。

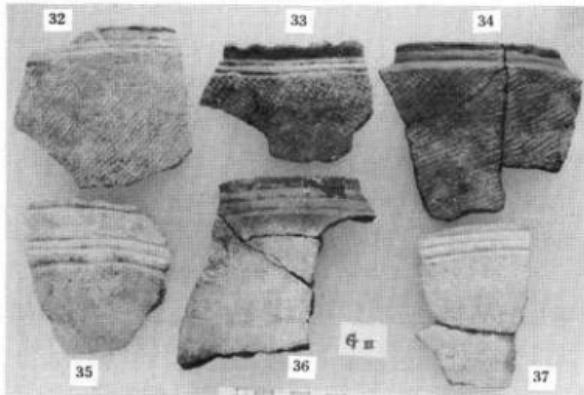
( 24～31 ) →ここに掲げた土器も「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製土器である。

・器形は、鉢形か深鉢形土器と思われる。これらの土器の口縁より頸部には、3条の沈線文が横走するものであって、( 27 )は肩部に粘土粒をもつてゐる。

◎これらの土器群の肩下部には、左頬・右頬する斜行縄文が施文される。これに比較して、P・L 3 → ( 20～22 )は、縄文が縱走するもので、單軸撓紋である。このように、「大洞C<sub>2</sub>式」期には、この二種の縄文の施文法がある。

〔A地区G<sub>1</sub>-2 グリットV層出土、土器〕

P・L 5



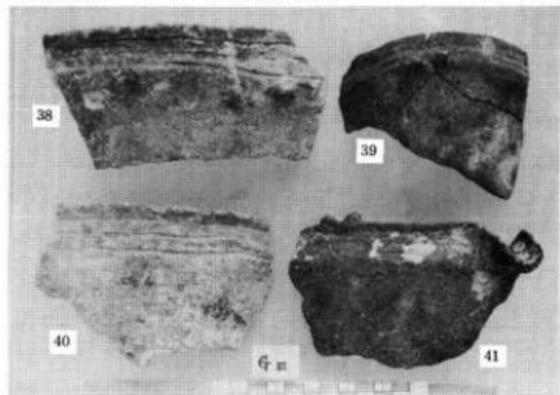
- 98 -

〔32～37〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」粗製土器である。

- これらの器形は、深鉢か鉢形土器と思われるが、(35)は、そのカーブから台付土器の可能性も残る。
- 口縁は、(33・35)は小波状を呈し、他は平縁である。また縄文は、(36)が單輪燃糸文で横走、他は左下りの斜行縦文である。
- 頂部には3条を基本とする沈線文が施文されるが、(35)は頂部が無文帶をなしている。この(35)の頂部が無文帶を有するものも一タイプである。

〔A地区G<sub>1</sub>-2 グリットV層出土、土器〕

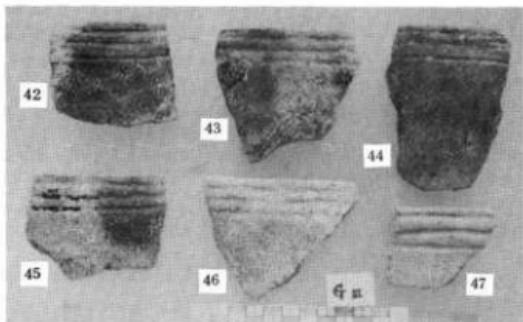
P・L 6

〔38～41〕→ここに掲げた土器も「大洞C<sub>2</sub>式」粗製土器である。

- このうち、(38・39)には、肩部に2ヶ1対の粘土粒を計4対、対象的に付すもので、平縁を呈する深鉢形土器である。
- (40・41)のうち、(40)の口縁は小波状を呈し、(41)は、2ヶ1対の突起を口縁に有し、片口のある深鉢形土器である。(40)も同じやや大形の深鉢形土器であろう。
- ④この(38～41)の頂部には、横走する3条の沈線文があり、胴部には左傾する斜行縦文が施文される。

〔A地区G<sub>1</sub>～<sub>2</sub> グリットⅢ層出土、土器〕

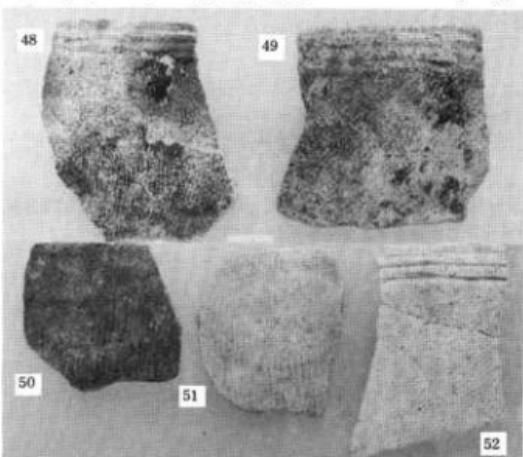
P・L 7

〔42～47〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」の深鉢形土器である。

- ・口縁が平縁で、3条を基本とする横走沈線文が頸部に施文され、胴部には、左傾する斜縦文がある。(但し、47は無文)
- ④この(42～47)は、「大洞C<sub>2</sub>式」における粗製深鉢形土器の主流を占めるタイプで、概して大型のものが多く、本遺跡でも出土量が多い。

〔A地区G<sub>1</sub>～<sub>2</sub> グリットⅢ層出土、土器〕

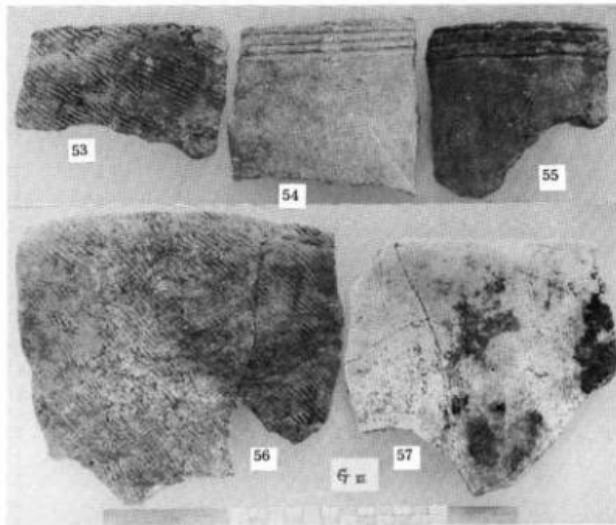
P・L 8

〔48～52〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製深鉢形土器である。

- ・このうち、(48・49・52)と、(50・51)は、二タイプに分けられる。前者には3条の沈線文があり、P・L 7-(42～47)と同類であるが、口頸部がやや内傾するものである。
- ・(50・51)は、沈線文ではなく、やや内傾する口縁下より、縦文が縱走するもので一タイプである。
- ④出土量は、前者(48～49)が多く、後者が少ないようと思われる。

〔A地区G<sub>1</sub>—2 グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 9

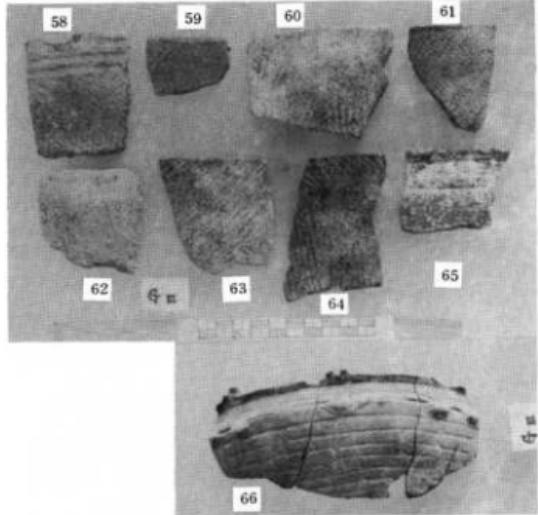


〔53～57〕→ここに掲げたものも縄文時代晩期「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製深鉢形土器である。

- このうち(54・55)は、ともに口縁下に3条の沈線文をもつ基本タイプのグループであるが、(54)は胴部に縱走する条痕文が施文されるもので、このものも晩期の一タイプである。
- (53・56)も口縁がやや内傾する大形の深鉢形土器で、縄文のみ施文されるものである。(57)は、前述の縄文のかわりに条痕文が施文されるもので一タイプをなすものである。

〔A地区G<sub>1</sub>—2 グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 10

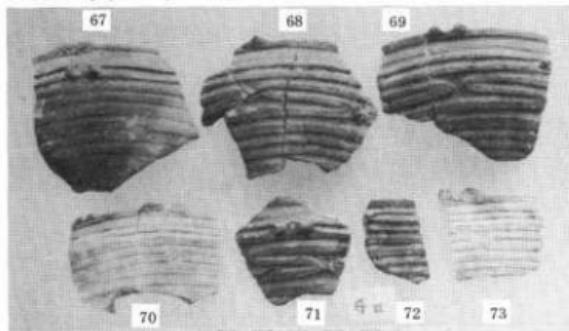


〔58～66〕→ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製深鉢形土器と、「大洞A式」精製鉢形土器である。

- このうち、(58・60・62・63)は、P・L 8・9で述べた、3条の横走沈線文や縄文のみのもの、および条痕文の施文されるタイプである。
- また、(59・61・63・64)は、器厚がうすいもので、深鉢形の一タイプである。(65)は口縁が小波状を呈する「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。
- (66)は、「大洞A式」土器であるが、頸部に大洞C<sub>2</sub>式後半の伝統を残存するものであろう。

〔A地区G<sub>1</sub>~2 グリットⅡ層出土、土器〕

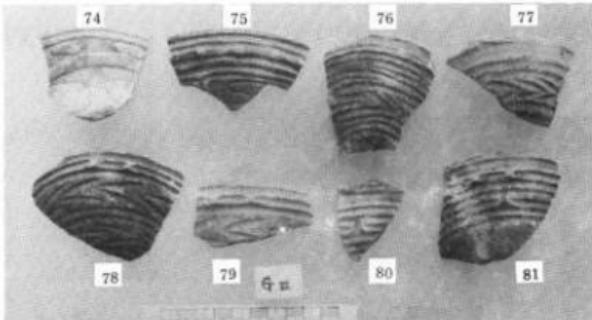
P・L 11



- 〔67~73〕→ここに掲げたものは、「大洞A式」の精製鉢形土器である。  
 • 口縁は平縁で、2ヶ1対の小突起を4対対象的に付し、頸部は、無文帶を有するもの(67・68・69・70・71)と、頸部の沈線文を有するもの(72・73)に分けられる。  
 • また肩部には、これも4対の粘土粒を持つが、その粘土粒は、前型式のものに類似し、頸部に無文帶とともに、「大洞C<sub>2</sub>式」の伝統が残るものである。  
 ◎頸部には、縦文を地文にして、入り組み工字文がある。この入り組み工字文は、ほぼ完成された文様パターンの一つである。

〔A地区G<sub>1</sub>~2 グリットⅡ層出土、土器〕

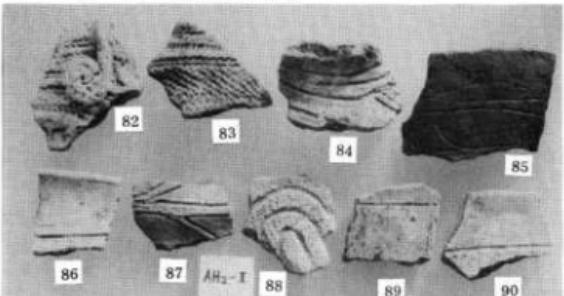
P・L 12



- 〔74~81〕→ここに掲げたものは、「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式」の皿形土器で、いずれも精製土器である。  
 • このうち、(74)は「大洞C<sub>1</sub>式」の皿形土器で、器形は口頸部が外反するものである。  
 • (75・76)は、「大洞C<sub>2</sub>式」の皿形土器で、特に(76)は、浅鉢に近いものである。  
 • (77~81)は、いずれも「大洞A式」皿形土器で、(77・78・79)は矢羽根状文、(80・81)は、入り組み工字文が施文される。このものも二タイプに施文で分けることが可能である。  
 ◎文様は、(75)は曲線文を見せ、(76)は曲線文と入り組み工字文・矢羽根文の未完成なものである。(P・L 2-11~14)に示したものと合わせて、「大洞C<sub>1</sub>式」皿形土器は、二タイプ(14・74)、「大洞C<sub>2</sub>式」皿形土器は、四タイプに分けられる。(11・12・75・76)

〔A地区H<sub>2</sub>グリットV層出土、土器〕

P・L 13

1  
15  
1

〔82～90〕→ここに掲げたものは、縄文時代前期・中期、および後期初頭「十腰内I式」土器である。

- ・(82)は、前期の円筒下唇d<sub>2</sub>式土器、(83)は中期の円筒上唇a式土器であろう。
- ・他の(85～90)は、いずれも縄文時代後期「十腰内I式」土器である。
- ・器形は、(84・87)は壺形、他は深鉢形土器と考えられる。施文は、いずれも沈線文である。(88)は、縄文を地文に渦文をついている。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットV層出土、土器〕

P・L 14

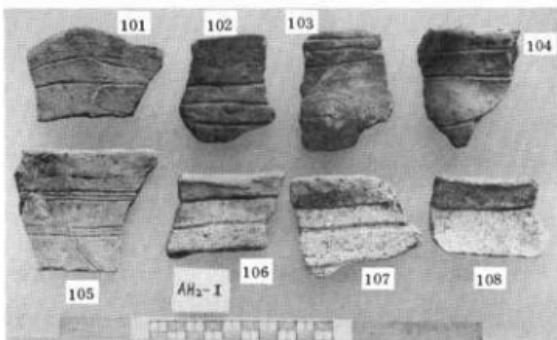


〔91～100〕→ここに掲げた土器群も、V層出土の縄文時代後期「十腰内I式」土器である。

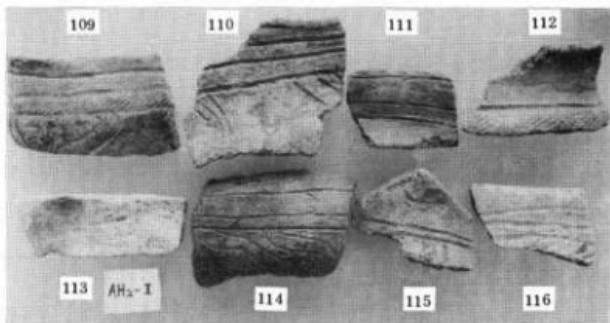
- ・いづれも深鉢形土器と思われるもので、沈線文が施文される。
- ・この沈線文は、平行に2～3条が基本で展開される。また、曲線文、区画文、それに縄文を充填する区画文等が見られる。
- ◎この沈線文を主体とする施文法は、中期後葉より始まり、後期十腰内I式期に盛行する。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 15

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 16



〔101～108〕→ここに掲げたものも「十腰内I式」土器である。

- これらの土器も、多分深鉢形土器であろう。このうち、(101)は、ゆるい山形の突起を有するものであり、(108)のように、口縁部が折り返えし口縁のものもある。
- 文様は、沈線文が主体で、ここに掲げたものには、縄文の地文はない。

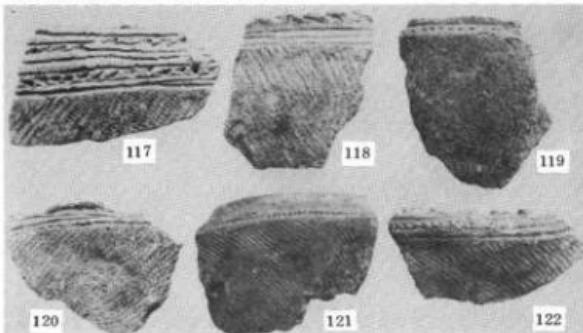
16

〔109～116〕→ここに掲げたものも縄文時代後期「十腰内I式」土器である。

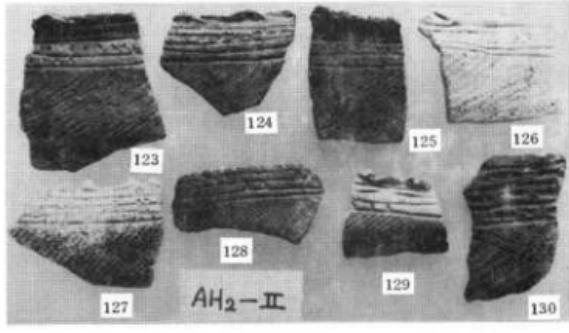
- 器形は、(112)は壺形、他は深鉢形か楚形土器であろう。このうち、(115)は、山形突起を口縁に持つもので、他の口縁も小波状を呈するものである。
- 文様は、この期の特徴である沈線文が主体であるが(109)は縄文を地文にした沈線文が施文されるものである。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器〕

P・L 17

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器〕

P・L 18

AH<sub>2</sub>-II1  
25  
3

〔117～122〕→ここに掲げたものは、縄文時代晩期「大洞C<sub>1</sub>式」粗製深鉢形か鉢形土器である。

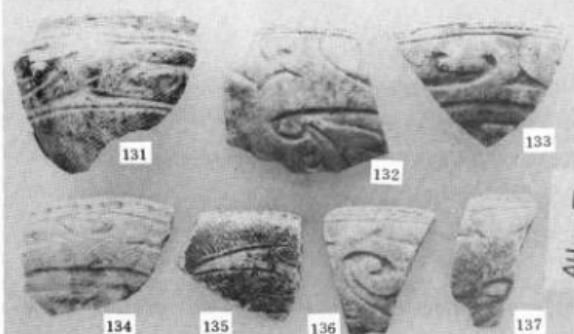
- ・このうち、(117・119～122)には、平行沈線文と刻目文が口頸部に施文され、とくに(117)は二段に施文される。
- ・また、(118)は、口縁に半衡状文の伝統を残しているものである。
- ◎胴部には、左傾(117・119・120)、右傾(118・121・122)する斜縞文が施文される。この右傾する縄文の施文されるものは少ない。

〔123～130〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>1</sub>式」粗製鉢形土器である。

- ・いずれも口縁が小波状を呈するもので、小突起をもつものも認められる。
- ・これらのものには、平行沈線文と横位の刻目文または刺突文が口頸部に施文される。
- ・胴部には、すべて左傾する斜縞文が施文される。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 19



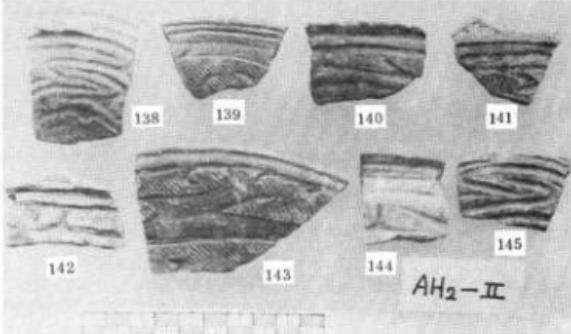
〔131～137〕→ここに掲げたものは、縄文時代晩期「大洞C<sub>1</sub>式」鉢形・皿形精製土器である。

- ・(131)は鉢形土器で、(132～137)は皿形土器である。これらの土器には、K字文(131・132)、X字文(133・136)、大槌骨文(134・135・137)が施文される。

◎また、口縁下には刻目文が施文されるものである。縄文時代晩期の大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式期には、皿形土器の生産がきわめて多い。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

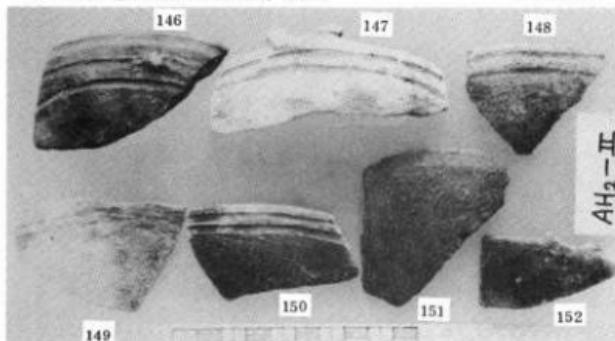
P・L 20



〔138～145〕→ここに掲げたものも縄文時代晩期「大洞C<sub>2</sub>式」の皿形および鉢形土器である。

- ・(142・144)は鉢形土器と思われる。なお(142)はA式の可能性もある。
- ・他の(138～141・143・145)は、皿形土器で、曲線文が流れるように施文される。

◎P・L 19においても述べたとおり、この期は皿形土器の出土が多い。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 21

A H<sub>2</sub> - II

〔146～152〕→ここに掲げたものも縄文時代晩期「大洞C<sub>2</sub>式」の皿形土器である。

- ・このうち、(146・147)は精製、他は粗製土器である。なお(152)はつぎのA式期にも併出する。
- ・施文は、平行沈線文のあるもの(146～150)、小突起のあるもの(147・152)、胸部に縄文のあるもの等細分すれば5類に分けられるが、他に(P・L 2-14)および(P・L 12)、(P・L 20)に示すように変化に富んでいる。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

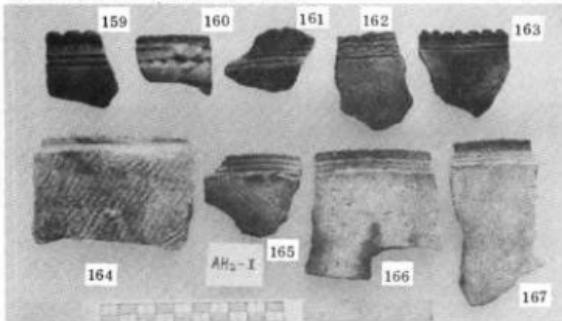
P・L 22

〔153～158〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>1</sub>式」精製壺形・皿形土器・および「同C<sub>2</sub>式」皿形土器である。

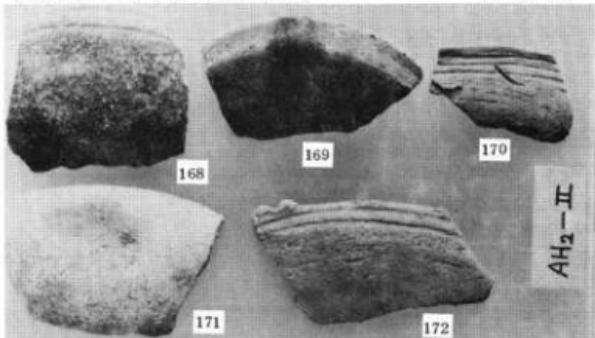
- ・このうち(157)は破片であるが細長い胴部に細長い口頸部を有する壺形土器と思われるものである。
- ・(158)は、「大洞C<sub>1</sub>式」皿形土器で上げ底である。他の(153～156)は、精製の「大洞C<sub>2</sub>式」皿形土器で、平行沈線文、曲線文が施文されるものである。

〔A地区KH<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 23

〔A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 24



〔159～167〕→ここに掲げたものは、縄文時代晚期「大洞C<sub>1</sub>式」の粗製鉢形土器と「同大洞C<sub>2</sub>式」の粗製鉢形土器である。

・このうち、(159～164)は「大洞C<sub>1</sub>式」、(165～167)は「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。

・(159～163)は、「大洞C<sub>1</sub>式」のメルクマールである刻目文を施文するもの、および(163)のように羊歯状文の名残りをとどめるもの等がある。

◎また、(164)のように、肩部が強く張り口縁が外反するものもある。このタイプは、大洞C<sub>1</sub>式の鉢形土器の一タイプである。

◎(165～167)は、「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器の一タイプで、この類の出土量はきわめて多いものである。

〔168～172〕→ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の皿形土器である。

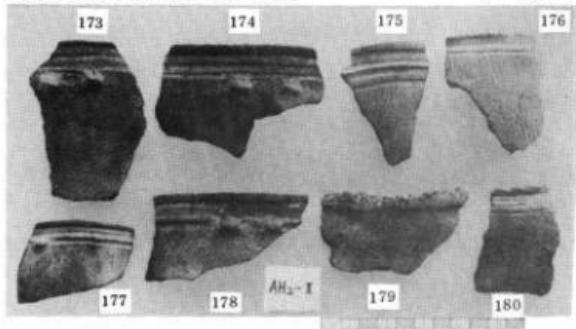
・このうち、(170・172)は(P・L 2-12・13、P・L 21-147)に示したものと同タイプのものである。

・また、(168)は頸部に無文帯を有するもので、(171)は無文のもので、出土数はわりに少ないタイプである。

◎さらに、(169)は肩部が張り、頸部が外反する器形の皿形土器で、つぎの大洞A式にも伴うようである。(研究を要す)

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器〕

P・L 25



— 95 —

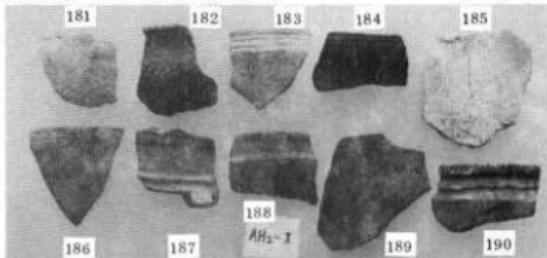
〔173～180〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器であるが、いずれも粗製土器である。

- ・このうち、(173・174・177・180)は、既述のように3条を基本とする沈線文が口頸部に施文される一群のタイプである。このものは出土量が多い。
- ・(175・176・178)は、頸部に無文帶をもつタイプで、(179)は、不鮮明であるがこのタイプであろう。

◎これらの(173～180)のうち、(176)は、やや右傾気味の縞文が施文され(0段多条のR・L)、他はすべて左傾する縞文が施文されるものである。すなわち(R・L)はきわめて少ない。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器〕

P・L 26

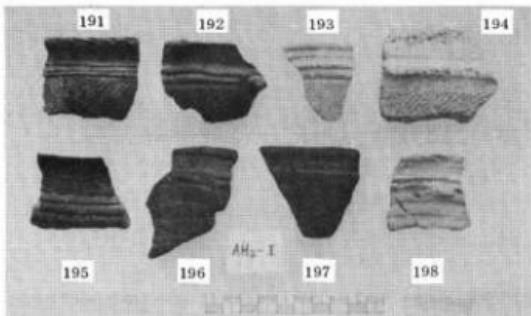


〔181～190〕→ここに掲げたものは、縄文時代晩期「大洞C<sub>1</sub>式」および「同C<sub>2</sub>式」土器である。いずれも粗製土器である。

- ・このうち、(182)は「大洞C<sub>2</sub>式」壺形土器、(181)は鉢形と見られるが「大洞C<sub>2</sub>式」の仲間か。(184)も「大洞C<sub>1</sub>式」鉢形の可能性がある。
- ・他はすべて鉢形か深鉢形土器で、(183・186・189・190)は3条～2条の沈線文を有するタイプ。(187・188)は頸部に無文帶をもつタイプで、いずれも「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。
- ・◎また、(185)は、条眞文を施文するもので、この施文をもつ一群も一タイプをなすものである。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 27



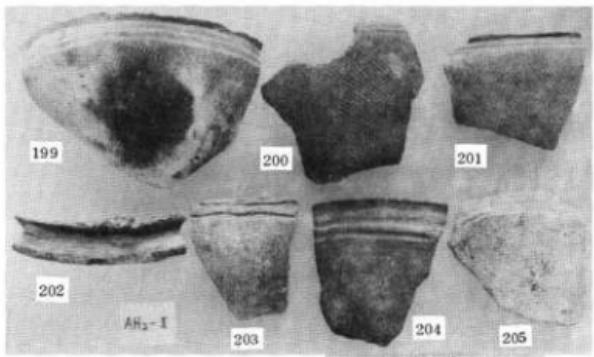
〔191～198〕→ここに掲げたものも縞文時代晩期「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形粗製土器である。

- ・このうち、(191・192・194・195・196・198)は、既に述べたように頸部に無文帯をもつタイプである。
- ・また、(193・197)は、頸部に3条の平行沈線文を施文するタイプである。
- ◎前者の頸部に無文帯をもつタイプは、沈線文が肩部に施文されるもので、肩部が張る傾向をもっている。そしてこのタイプは、「大洞C<sub>2</sub>式」期の後半に盛行するようである。

— 197 —

〔A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 28

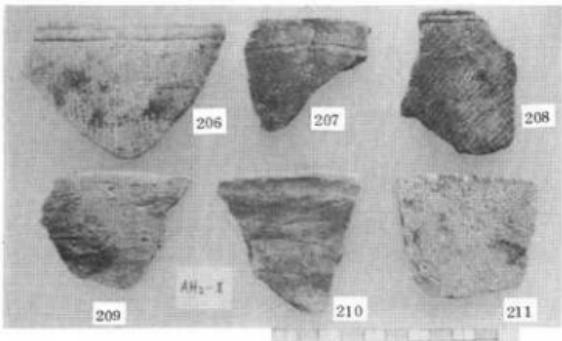


〔199～205〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製鉢形土器・広口壺形土器である。

- ・(202)は、広口壺形土器の口縁部破片で、頸部が無文帯をなすものらしい。
- ・他の(199～201・203～205)は、この期の基本タイプである頸部に3条の平行沈線文が施文されるもので(203は2条)鉢形土器である。
- ◎縞文が頸部に施文されるが、(199)は、縦位の単軸燃糸文(R・g)。(200)は右傾する斜縞文(R・L)→0段多条。(201・204・205)は左傾する(L・R)、(203)は単軸燃糸文(R・g)である。
- ◎すなわち、縞文には三種の施文法がある。縦位の燃糸文、左傾する(L・R)、右傾する(R・L)で、この(R・L)少ない。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 29

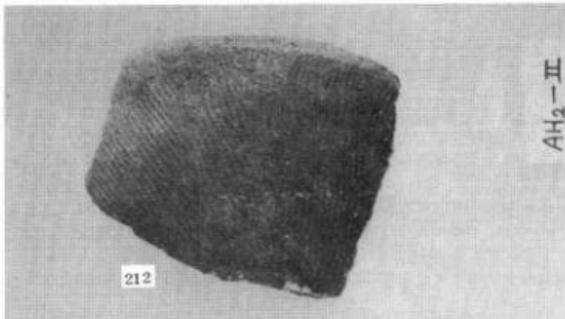


〔206～211〕→ここに掲げたもののうち、(206～208・211)は「大洞C<sub>2</sub>式」粗製鉢形土器である。  
・また、(209・210)は、型式名をきめかねるもので、縄文時代後期の土器の混入か、類例を持ちたい。  
・(206～208・211)のうち、(206・207・211)は単軸燃糸文、(208)は、左傾する斜繩文である。

| 86 |

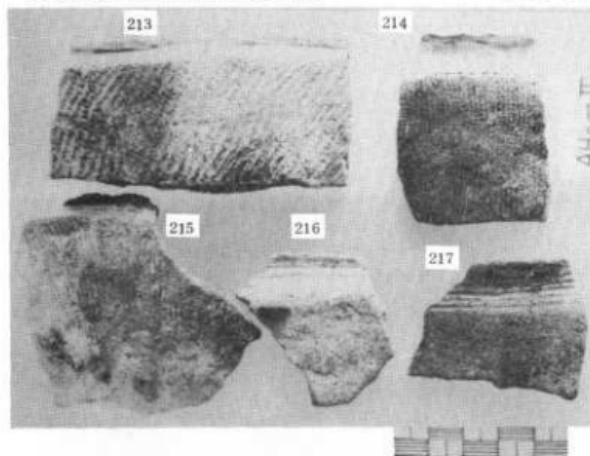
〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 30



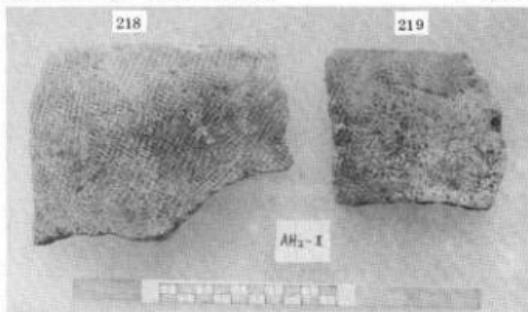
〔212〕→ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製皿形土器である。  
・このものは平縁で頸部が軽くクボミ、肩部が張る器形の皿形土器である。  
・施文される縄文は、0段多条の(L・R)で密に施文される。  
◎この類は、口頸部の形状から「大洞C<sub>2</sub>式」の後半に出現し、つぎの型式である「同A式」にも伴うものと思われる。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器〕



P・L 31

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器〕



P・L 32

〔213～217〕→ここに掲げたものは、「大洞C<sub>1</sub>式」の深鉢形粗製土器である。

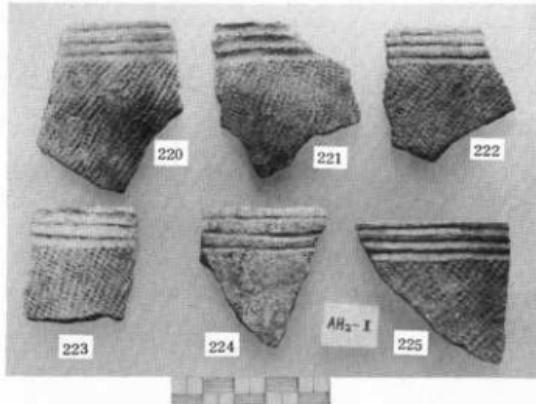
- これらのはものは、いずれも肩部が張るタイプのもので、しかも頸部の施文帯がせまいものである。
- 権様は、(214)は肩部に小刺突文があり、(215・216・217)には平行沈線文が施文される。これらは、つぎの「大洞C<sub>2</sub>式」に共通するが、口頸部の外反が強く、この期のものとした。

〔218～219〕→ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製深鉢形土器である。

- この(218・219)は、(P・L 9-56、P・L 10-60・63)と同類であって、口縁部がやや内傾するタイプで大形の土器である。
- 施文される繩文は、(218)は左傾する(L・R)、(219)は左傾発走する(L・R)である。

[ A 地区 H<sub>2</sub> グリット II 層出土、土器 ]

P・L 33



- 100 -

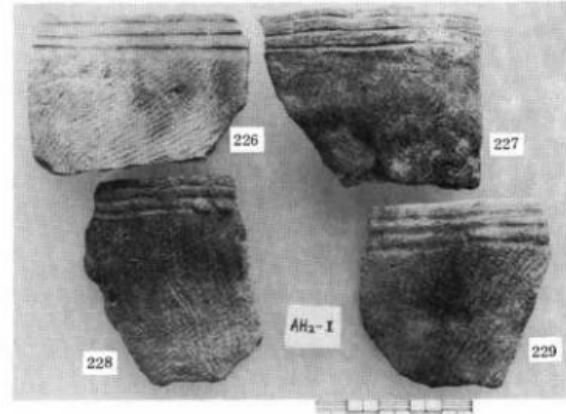
[ 220 ~ 225 ] → ここに掲げたものは「大洞 C<sub>5</sub>式」の典型的な深鉢形粗製土器である。

・いずれも平縁で、3条を基本とする平行沈線が施文されるもので、制部の繩文は、すべて( L・R )で左傾する。

◎これらのものの同類は、( P・L 7-42~47、P・L 8-48・49 )であって出土量も相当多いタイプである。

[ A 地区 H<sub>2</sub> グリット II 層出土、土器 ]

P・L 34



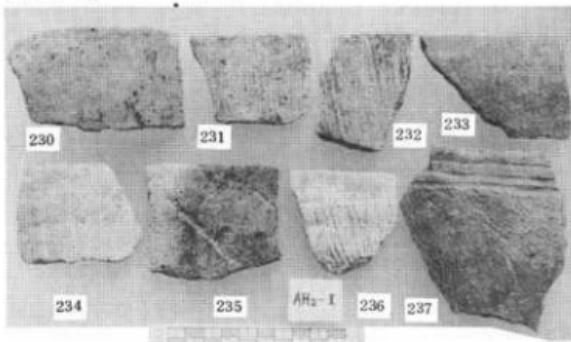
[ 226 ~ 229 ] → ここに掲げたものも「大洞 C<sub>5</sub>式」の粗製深鉢形土器である。

・いずれも、( P・L 33- 220 ~ 225 )に掲げたものと同様のもので、3条の沈線文が施文される。

・施文される繩文は、( 226 + 227 + 229 )は、左下りの斜繩文、( 228 )は、( L・E )の回転然系文が不整に施文されたものである。

[ A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器 ]

P・L 35



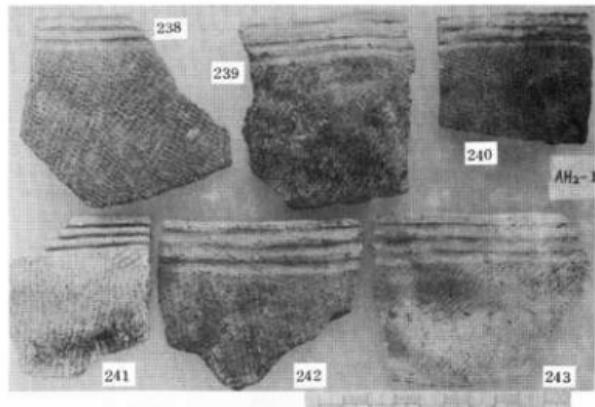
| 101 |

[230～237] →ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製大形深鉢形土器である。

- このもののうち、(237)は( P・L 33・34 )に示すものと同類である。
- 他の(230～236)は、口縁部がやや内傾するもので、胴部には条痕文が施文される。(237)も条痕文が施文されるものである。

[ A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器 ]

P・L 36

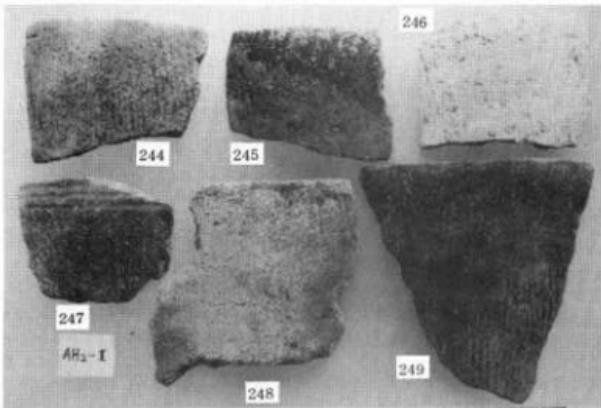


[238～243] →ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製大形深鉢形土器である。

- ◎これらのものは、既に述べた( P・L 33・34 )と同類のものである。また、(242)は( P・L 35～237 )とも同類である。

〔A地区KH<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 37



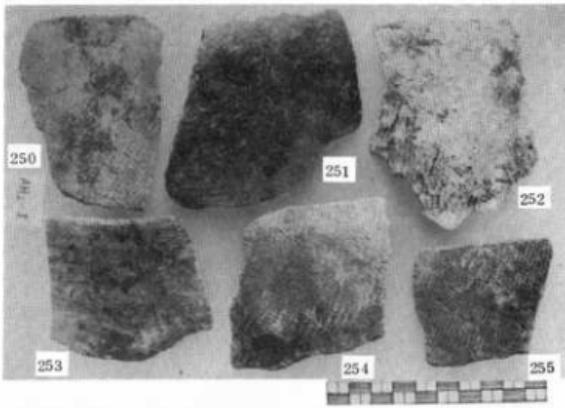
〔244～249〕→ここに掲げたものは、縄文時代晩期「大洞C<sub>2</sub>式」の大形粗製深鉢形土器である。

- このうち(247)は口縁部に平行する沈線文が3条施文されるもので、既述したように、(P・L33・34・36)に示したものと同タイプのものである。

- ◎また、(244～249)の胴部には、条痕文が施文されるもので(P・L35、P・L36～242)と同じタイプで「大洞C<sub>2</sub>式」期において特に盛行するものである。なおこのタイプのものの使用期間は相当長いよう見受けられる。

〔A地区KH<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 38

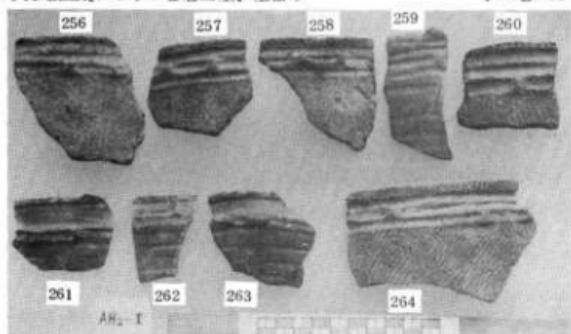


〔250～255〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」大形粗製深鉢形土器である。

- これらのうち(251)の口縁は小波状を呈するものようである。他のものは、平縁であるが、ゆるい起状をもつものもある。
- いずれも口縁部がゆるく内傾するタイプで、(P・L32)の土器と同タイプのものである。
- 胴部の縦文は、すべて左傾する(L・R)である。(但し253は無文)

〔A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 39

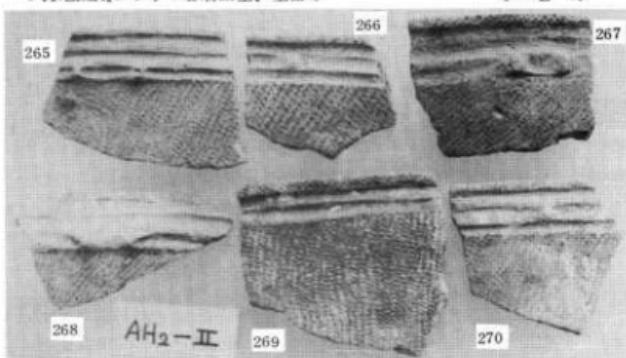


〔256～264〕→ここに掲げたものは、縄文時代晩期「大洞A式」粗製鉢形、または深鉢形土器である。

- ◎このうち(261・263)は、頸部に無文帯を持つもので、この無文帯を頸部に残す手法は、「大洞C<sub>2</sub>式」の伝統であろう。
- ◎い、いずれも口縁上端がやや外反気味で、(258・260・264)のように口縁上部に縦文を付するもの、無いものに細分できる。
- ◎(256～264)のすべてにわたって、「大洞A式」特有の小突起があり、短沈線で突起間を連結する施文手法を示している。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 40

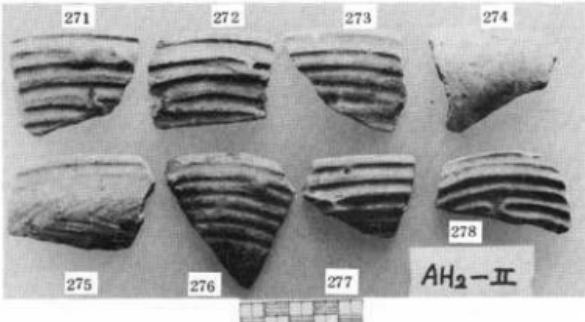


〔265～270〕→ここに掲げたものも「大洞A式」の粗製深鉢形土器である。

- ◎このうち、(268)は肩部が張るもので、その突起の形態が他に比して特徴がある。このように側面に突き出る「突起」の形態は、「大洞C<sub>2</sub>式」期の後半に出現するようである。
- ◎(265～270)すべてが口端に縦文を付し、第2沈線～第3沈線上に短沈線で突起間を連結する手法は、「大洞A式」で一般化されるようであるが、その初原は前型式的後半にある。
- ◎胴部の縦文は(L・R)が主体(265・266・267・268・270)で、(269)は縱走する(L・r)の單軸燃系文である。

[A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器]

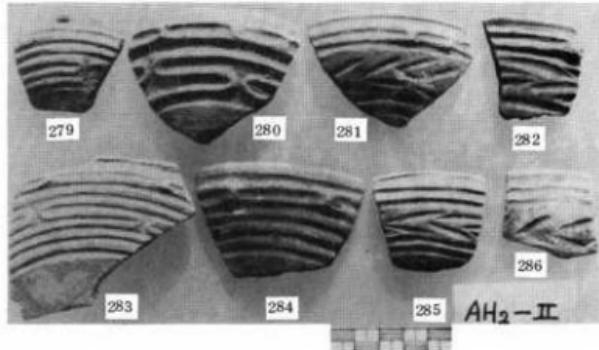
P・L 41



AH<sub>2</sub>-II

[A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器]

P・L 42



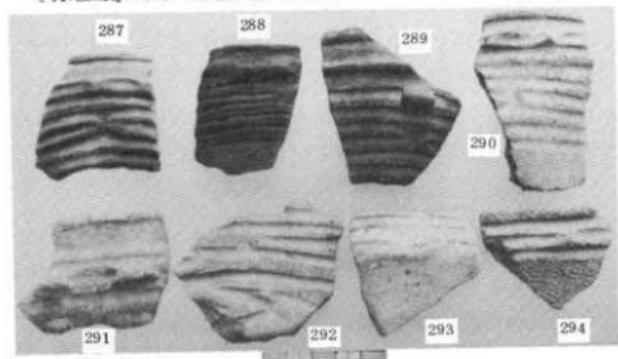
AH<sub>2</sub>-II

[271～278]→ここに掲げたものは「大洞A式」精製皿形土器である。  
 •このうち(274)は無文、(275)は胸部に矢羽根状文が施文され、その空間に(R・L)の縦文が地文に見られるもので、皿形土器で縦文のあるものは出土数が少ない。  
 •他の(271～274・276～273)は、典型的な「入り組み工字文」が施文されるもので、(P・L12-80・81)と同様、この期の皿形土器の典型である。

[279～286]→ここに掲げたものも「大洞A式」精製皿形土器である。  
 •このもののうち、(279・280・283・284)は「入り組み工字文」が施文される。  
 •また、他の(281・282・285・286)は、矢羽根状文(櫛文)が施文されるものである。  
 ◎当観音林遺跡では、「入り組み工字文」が器形に関係なく一般的であるが、「矢羽根状文」が施文されたものの出土は、今回多い。この文様のものは、地域によって出土する遺跡、出土しない遺跡、または地点等片寄りがあるようである。

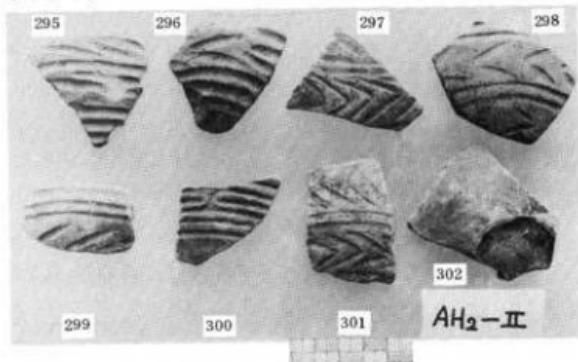
[A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器]

P・L 43



[A地区H<sub>2</sub>グリットII層出土、土器]

P・L 44



AH<sub>2</sub>-II

〔287～294〕→ここに掲げたものも「大洞A式」粗製鉢形土器または深鉢形土器である。

- このうち頸部に無文帯を有するもの(287・288・289・291)が認められ、前型式の伝統が残る。
- 他の(290・294)および(291)には口端に縦文が施文されるもので、(P・L 39・40)にもその手法が認められる。
- 施文は(292)は、矢羽根状文(櫛杉文)。(287～290)は、入り組み工字文。(293・294)は頸部に縦文がある。

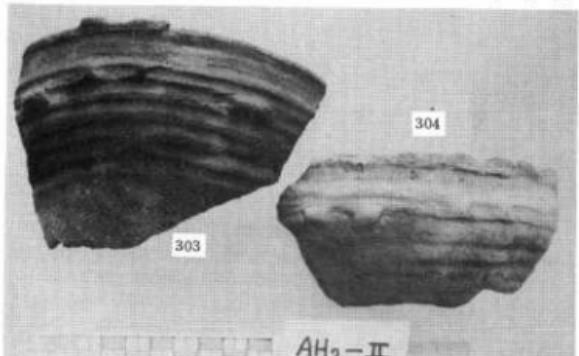
〔295～302〕→ここに掲げたものは、「大洞A式」精製皿形土器である。このうち(300)は、入り組み工字文があり、(P・L 41・42)に示したものと同類である。

• また、(295～299・301)は、矢羽根状文のもので、このものも既述の(P・L 42)のものと同類である。

◎このように绳文時代晚期の「大洞C<sub>2</sub>～A式」期には、バラエティに富んだ皿形土器の出土が多い。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器〕

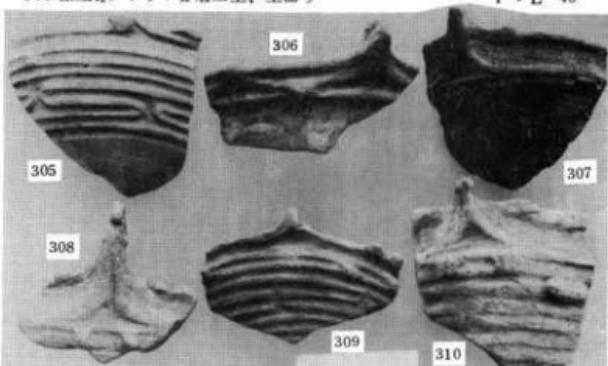
P・L 45

AH<sub>2</sub>-II

- 〔303～304〕→ここに掲げたものも「大洞A式」粗製鉢形土器である。  
 • 両者とも、口縁に小突起を4対もつもので、頸部に無文帯をもっており、胴部には入り組み工字文が施文されるものである。  
 • これらのものは( P・L 43-287～289 )と同タイプのものである。

〔A地区H<sub>2</sub>グリットⅡ層出土、土器〕

P・L 46



- 〔305～310〕→ここに掲げたものも「大洞A式」精製鉢形土器である。なお、(307)は台付鉢形土器かも知れない。  
 • これらのうち、(306・307・308・310)には突出する突起が一ヶ付くものであろう。  
 • この(305～310)には、入り組み工字文、小突起等「大洞A式」土器の特徴を備えたものである。